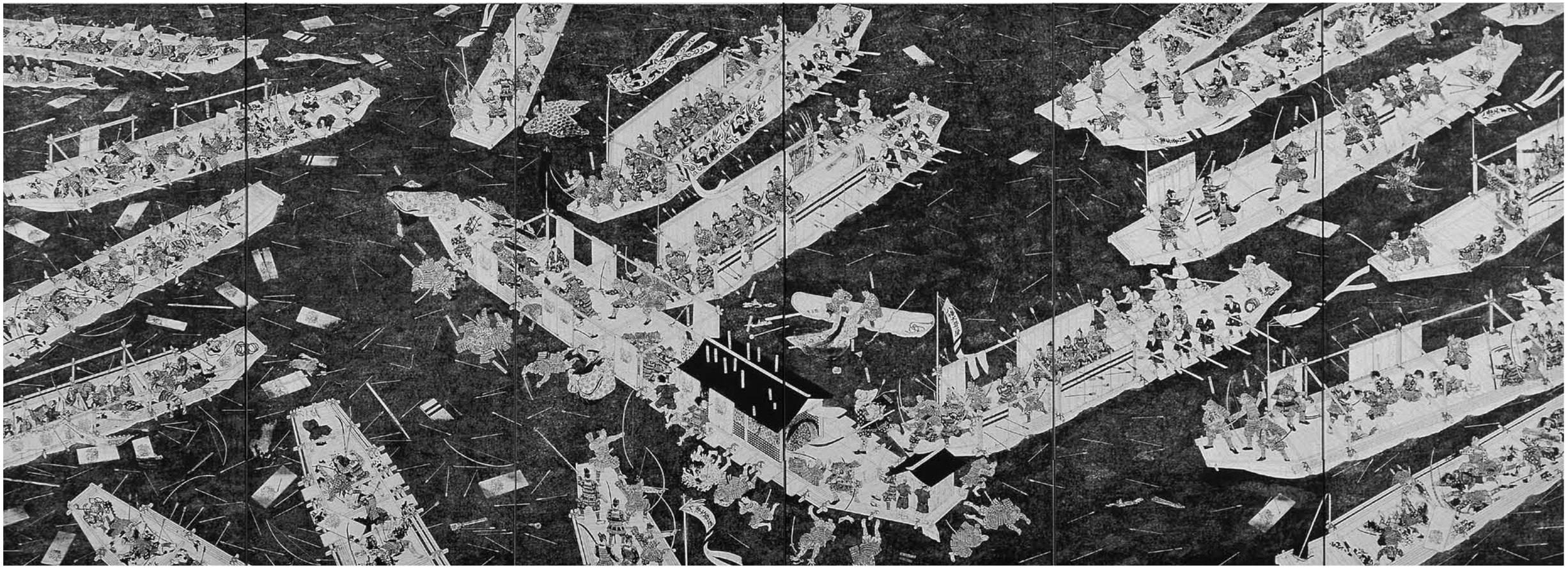
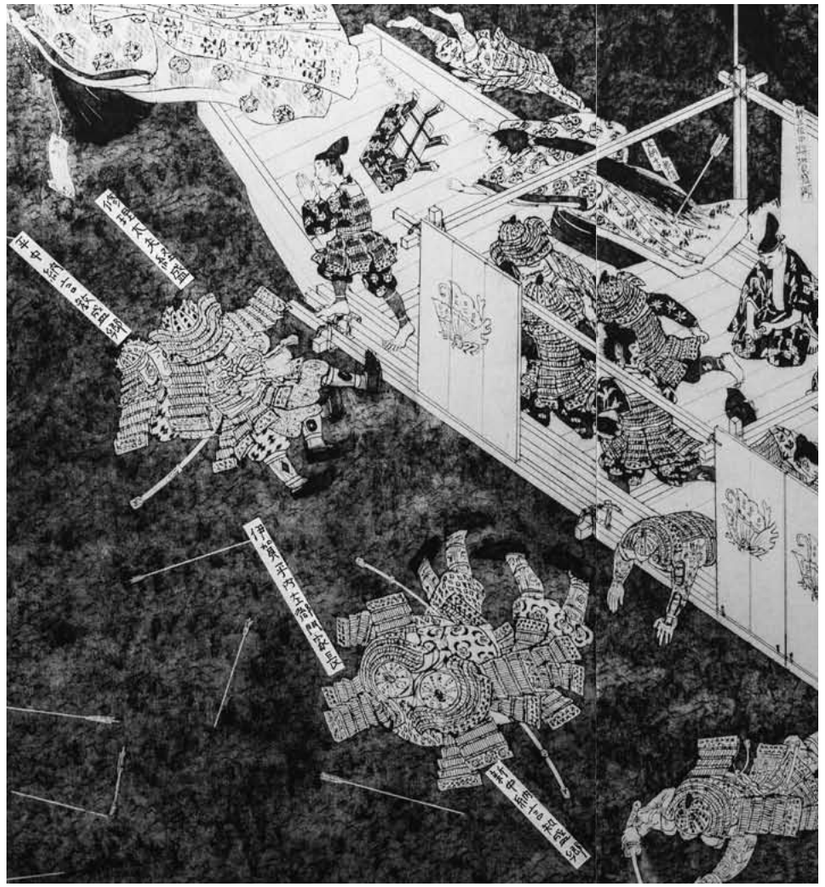


およそ能登守教経の矢先にまはる者こそなかりけれ。矢だねのあるほど射尽くして、今日を最後とや思はれけん、赤地の錦の直垂に、唐綾威の鎧着て、いかもの作りの大太刀抜き、白柄の大長刀の鞘をはづし、左右に持つてなぎまはりたまふに、おもてを合はする者ぞなき。多くの者ども討たれにけり。新中納言使者を立てて、「能登殿、いたう罪なつくりたまひそ。さりとてよき敵か。」とのたまひければ、「さては大将軍に組めごさんなれ。」と心得て、打ち物茎短にとつて、源氏の船に乗り移り乗り移り、をめき叫んで攻め戦ふ。

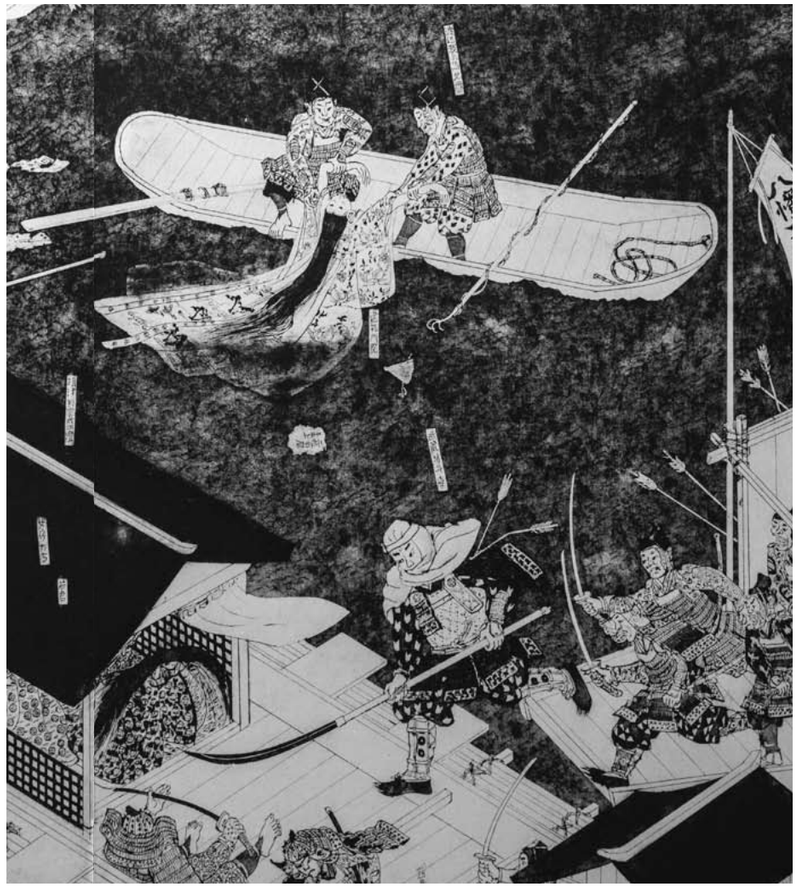
新中納言、「見るべきほどのことは見つ。いまは自害せん。」とて、めのと子の伊賀平内左衛門家長を召して、「いかに、約束は違ふまじきか。」とのたまへば、「子細にや及び候ふ。」と中納言に鎧二領着せたてまつり、我が身も鎧二領着て、手を取り組んで海へぞ入りにける。

……海上には赤旗・赤印投げ捨て、かなぐり捨てたりければ、竜田川のもみぢ葉を嵐の吹き散らしたるがごとし。汀に寄する白波も薄紅にぞなりにける。（平家物語・巻十一・能登殿最期）

井上員男『版画平家物語』より、「十一　壇の浦の合戦」



上図の海上の中央で幾領もの鎧が重なり合っているように見えるのが、知盛（向かって右）と家長。滅亡の時を見届けた知盛は、生死を共にすると約束した乳兄弟の家長と、それぞれ鎧二領を着込み、手を取り合い海へ身を投じた。



入水した建礼門院が、源氏方の船に引き上げられる。その手前にかろうじて見えるのが、もはや海に沈まんとする安徳天皇と二位尼の最期の姿。武蔵坊弁慶は、大長刀を構え平氏の唐船に威勢よく飛び移る。

太刀と大長刀を左右の手に持ち敵将と組み合おうとする教経と、船を素早く飛び移り逃げる義経。細かく描かれた教経の装束は、赤地の錦の直垂に唐綾威の鎧。

寿永四年（一一八五）三月二四日、大軍を率いて来襲した源氏軍を、平知盛を大将とする平家軍は、長門（現在の山口県北西部）の壇の浦で迎え撃つ。水軍に長けた平氏軍は最初こそ善戦するが、源氏の兵は水手や船頭まで射殺し斬り殺し猛攻撃をしかけ、形成は逆転。一気に追い詰められ、知盛は安徳天皇、その母の建礼門院、清盛の妻であった二位尼らの乗る船に、敗戦濃厚な状況を伝える。二位尼は幼い安徳天皇を抱き上げ、宝剣を腰に差し神璽を抱えると、「弥陀の浄土へ参りましょう。波の下にも都がございます」と申し上げ、海に身を投じる。続いて建礼門院も女たちも次々入水した。

平氏屈指の勇将能登守教経はこれを最後と覚悟を決め、壮絶な戦いを続けるが、知盛は「罪つくりな殺生をするほどの敵ではない」と助言。それでは大将をと、教経は源義経を探し回る。同じ船に乗り合った義経は敵わないと思ったのか、離れた味方の船に飛び乗って逃げる。追うことをあきらめた教経は「我を生け捕りにしてみよ」と大声を上げるが、安芸実光兄弟が斬りかかってきたので、彼らを道連れに抱え、海に飛び込んだ。これを知った知盛も「見るべきものは見た」と乳兄弟伊賀平内左衛門家長を伴い入水し、平家一門の侍らも続く。海上は、平家の赤旗・赤印で紅葉を散らしたようであった。

国語教室
美術館

和とは何か

長谷川 櫂

一九五四年（昭和二九年）―。俳人。熊本県生まれ。主な著書―句集『沖縄』、評論集『芭蕉の風雅』など。

高校の国語の教科書『新編現代文B』（大修館書店）に「和の思想、間の文化」が載っています。これは『和の思想』（中公新書）からの抜粋です。この文章について書いておきたいことがあります。

というのは、和がしばしば誤解されるからです。じつはその誤解を解くために『和の思想』を書いたのですが、和を生みだした日本人自身がいまだに和について誤った先入観をもっているのではないかと思われてなりません。

たとえば「クラスで人の和を大事にしよう」というと、ほとんどの人は「クラスのみんなが仲よくすることだ」と思います。次に仲よくするためには「みんなが同じでなければならない」と考えます。クラスに三十人いたら、ほんとうは一人一人がみな違うのに、その違いを無視して、みんな同じでなければならないと考える。これはとても窮屈な考え方です。

それどころか弊害があります。和＝仲よくすること、みんなが同じになることと考えると、同じになれない人は和に反していることになります。クラスの中に変わった子がいると、いじめられることがありますが、その原因はここにあります。昭和戦争中、戦争に一致協力しない人を「非国民」と呼びました。これは国家的ないじめです。このような歪められた和は異質なものを排除する原因にもなるわけです。

では、ほんとうの和とはなにか。本来の和とは互いに異なるもの同士が調和しあうことです。音楽には和音がありますが、ド・ミ・ソとかド・ファ・ラのように異なる音が調和しあうことです。もしド・ド・ドとかファ・ファ・ファのように同じ音を重ねても和音とはいわないし、調和ともいいません。音が大きくなるだけのことです。

料理には「和える」という調理法があります。蒟蒻の白和えは蒟蒻と豆腐を混ぜたもの、筍の木の芽和えは筍と山椒の芽を混ぜたものです。このように「和える」とは異なる食材を混ぜあわせて、なじませることです。同じもの同士、蒟蒻と蒟蒻、筍と筍をいくら混ぜても「和える」とはいいません。

同じように人と人との関係においても、和とは互いに異なる者同士が互いの違いを認めたうえで協調しあうことです。同じ考え、似た性格の人がいっしょに何かをしても和ではありません。じつは馴れあいにすぎないかもしれません。

友だちでも夫婦でも、はじめから相手が自分と同じだと思って接していると破綻する。なぜなら友だちであれ夫婦であれ、人はみな異なるからです。そこではじめから相手は自分とは違うのだと思って接することが大事であるということになります。

日本史で出てくる聖徳太子の「十七条の憲法」の第一条は「和をもって貴しとなす（以和為貴）」ですが、これもただ仲よくしようというのではありません。聖徳太子の時代、大和朝廷には有力な豪族たちがいて、どうにも政治がうまくゆかない。しばしば武力闘争になる。そこで「和をもって貴しとなす」というのは豪族たちの利害や言い分の違いをわかったうえで、武力によらず、どうにか政治つまり話し合いで折りあってゆこうということなのです。

このように互いの違いを認めたうえで、どうにか言葉で折りあってゆく、いいかえれば異質なもの同士が共存してゆくこと、これが和なのです。さらに和の理想というものがあるとすれば、それは互いに異なるもの同士が共存するだけでなく、それぞれの個性や持ち味を思う存分発揮できる状態のことです。

このような和という考え方は今後の日本だけでなく国と国との関係においても重要な思想であり、有効な方法になるのではないでしょうか。

平和という言葉にも和の字が入っています。では平和とは何か。これについても多くの人が誤解しているようです。ほとんどの人は「戦争のない世界」「平穏でなごやかに暮らしていけること」と答えます。

しかし、ちょっと考えてみると、すぐわかることですが、そんな状態がありうるでしょうか。人間は一人一人みな異なる。さまざまな理想や欲望や利害を抱えている。ぶつかりあわないはずがない。

同じように国と国も互いに異なります。主義も違えば国益も違います。こちらも放っておけば必ずぶつかりあう。そして戦争になる。今の世界を眺めればわかるはずです。

では平和とは何か、とふたたび問われれば、主義や国益の違いはともかくとして言葉で折りあっている状態ということになります。言葉での折りあい、つまり言葉による戦いこそが平和なのです。それは決して平穏ともなごやかともいえないかもしれません。

教科書著者エッセイ

教材紹介

「和の思想、間の文化」

異質なものの調和を意味する「和」と、その実現を空間的・時間的・心理的な側面から支える「間」。この両者の関係から日本文化の本質に迫る。（『新編現代文B』『現代文A』）

特集◉ 羅生門一世紀

インタビュー

百年目の「羅生門」

関口安義（せきぐちやすよし）

聞き手：編集部

一九三五年、埼玉県生まれ。都留文科大学名誉教授。中国・河北大学、アメリカ・オレゴン大学、ニュージーランド・ワイカト大学などで客員教授を務める。専門は日本近代文学で、特に芥川龍之介研究の第一人者として知られる。著書は、『芥川龍之介』（岩波書店）、『「羅生門」を読む』（小沢書店）、『芥川龍之介とその時代』（筑摩書房）など、多数。

「羅生門」が世に出てちょうど百年。この節目を機に、芥川研究の第一人者、関口安義先生をお迎えし、いまこの作品を読む意義、研究の進展と新しい解釈の地平、国語の先生方や高校生に考えてほしいことなどについてお話をうかがった。

■「二つの震災」と芥川の言葉

――「羅生門」が発表されて一〇〇年を迎えました。長年芥川龍之介研究を重ねてこられて、どんな感慨をおもちでしょうか。

一〇〇年前に二三歳の一大学生によって書かれた「羅生門」を、改めて取り上げて考えるとき、それなりの視点をもつべきでしょう。今なぜ「羅生門」なのか、ということですね。そうするとやはり、四年半前の東日本大震災を抜きにしては考えられないと思います。三・一一というかつてない大震災に直面したことで、私たちは各自の生き方そのものが問われることになりました。その新局面をふまえた上で、文学の創造や、鑑賞・批評を再考することが必要なのではないでしょうか。

私自身は、芥川を見る目が三・一一以降より深まった気がします。かねてより自死した作家として否定的に評されることが多かった芥川ですが、三・一一という大災害を経た今、その作家の誠実な営為というものを改めて問うべきだと思うのです。

芥川が生きていた時代にも、関東大震災という未曽有の震災がありました。東京が焼野原となり、多くの人々が犠牲になった姿を目の当たりにして、芥川は十ばかりの評論・エッセイや、震災を反映した小説もいくつか書いています。そして、そこに表れている彼の思いは、意外に思われるかもしれませんが、とても建設的で力強いものです。

東日本大震災に対して、当時の東京都知事、石原慎太郎氏は「天罰だ」と発言しましたが[*(1)]、同じように関東大震災の際には実業家の渋沢栄一が「天譴（てんけん）」と言いました[*(2)]。それに対して芥川は「天譴なりなどと信ずること勿（なか）れ」、「否定的精神の奴隷となること勿れ」と主張したのです[*(3)]。もっと我々は希望をもって生きなければならない、ということです。この言葉が、三・一一を体験した今、深い意味をもつのです。私は長い間、芥川と接してきましたが、東日本大震災を体験して、改めて彼の存在がよみがえってきた気がしています。

■「羅生門」評価・芥川評価の変化

――芥川には自死した作家、苦悩の作家というイメージがあり、「羅生門」も暗い作品と評価される傾向があった。それを見直すべきだということですね。

かつて「羅生門」は、孤独、暗い、その書き手である龍之介は、陰鬱な作家である、政治や社会には無関心である、とされました。宮本顕治の『敗北の文学』[*(4)]に代表されるように、言わば人生に敗北した作家であると、否定的に語られていました。しかし、研究が進み、多角的な見方が増えていくにつれ、今の若手の研究者たちは、芥川をもっと積極的にとらえようとしています。芥川像、「羅生門」評価というものは、確実に変わってきました。今こそ、「羅生門」を再認識する時期でしょう。

――「羅生門」の外国語訳も多くあるようですが、海外での芥川作品の評価はいかがでしょうか。

芥川作品の翻訳は非常に多く、世界四十か国を上回る国で読まれ、翻訳数は一〇〇〇点に迫る勢いです。中でもこの二十年ほどの中国、韓国での芥川評価の高まりが目立ちます。

戦前から文化大革命後しばらくの中国では、芥川は中国蔑視極まりない作家であるとされ、読まれていませんでした。それは、時代背景をふまえた研究が進んでいなかったためです。

芥川は大阪毎日新聞社の社員として、『大阪毎日新聞』に、「上海游記」「江南游記」といった紀行を書いています。

(1) 石原慎太郎・東京都知事は二〇一一年三月一四日、東日本大震災に関して、「日本人のアイデンティティーは我欲。この津波をうまく利用して我欲を一回洗い落とす必要がある。やっぱり天罰だと思う」と発言し、翌日撤回した（新聞各紙報道）。

(2) 関東大震災に際して渋沢栄一は「今回の大震災は到底人為的のものでなく、何か神業のやうにも考へられてならない。即ち天譴といふやうな自責の悔を感じない訳には行かない。」（『龍門雑誌』、一九二三年一二月）などと、天譴説を説いた。

(3) 「同胞よ。面皮を厚くせよ。『カンニング』を見つけられし中学生の如く、天譴なりなどと信ずること勿れ。僕のこの言を倣す所以は、渋沢子爵の一言より、滔滔と何でもしやべり得る僕の才力を示さんが為なり。されどかならずしもその為のみにはあらず。同胞よ。冷淡なる自然の前に、アダム以来の人間を樹立せよ。否定的精神の奴隷となること勿れ。」（「大正一二年九月一日の大震に際して」「三　大震に際せる感想」より）

(4) 宮本顕治が芥川龍之介を批判的に論じた論文。一九二九（昭和四年）年八月、雑誌『改造』の懸賞論文に当選し、文壇デビュー作となった。その次席は小林秀雄の『様々なる意匠』であった。

した。その集大成が『支那游記』です。当時は、内務省の厳しい検閲がありましたので、中国の紀行文などを率直に書くと、たちまち検閲にひっかかり、場合によっては出版差し止めになってしまう。そこで、ところどころジョークを飛ばす。そんなところが中国人からは中国蔑視だととらえられたんでしょうね。

ところが、近年は中国の大型書店に行きますと、訳者が異なる『支那游記』が『中国游記』というタイトルで三種も並んでいるんです。その中の一冊である、上海外国語大学教授の陳生保さんが書かれた解説を見て驚きました。「芥川は一九二〇年代頃の中国をしっかりととらえている」と評価しているんですね。「芥川は上海という町は売春婦があふれて汚い町である」などと書いていますので、文化大革命時代なら「けしからん」となった。ところが今や、当時の中国を明確にとらえた『支那游記』(『中国游記』)は、歴史的な価値があると評価されているのです。そして、二〇〇五年三月には、『芥川龍之介全集』全五巻が山東文芸出版社から一挙に刊行されるまでになりました。

韓国では、ハングル版の『芥川龍之介全集』が全八巻の計画で刊行されていて、つい先頃、第六巻が出ました。韓国は東アジアではまれなキリスト教国ですから、前々から芥川の切支丹物に対する関心が強くあったのですが、全集が出てから芥川人気がぐっと高まりました。訳本の数では村上春樹と並ぶほどです。

英訳では、村上春樹の訳者として知られるJ・ルービンが、『Rashōmon and Seventeen Other Stories』(『羅生門他十七篇』)をイギリスのペンギン社から出した。イギリス、カナダ、アメリカ、オーストラリア、ニュージーランドなど、英語圏でよく売れています。日本ではそれを逆輸入し、『芥川龍之介短編集』として新潮社から出ています。今まで翻訳されていなかった「忠義」など九作品も訳出され、評判になりました。

ロシアでもヒペリオン出版社から『芥川龍之介選集』が二〇〇二年に完成しています。他の欧州諸国でも、芥川の研究や翻訳は盛んです。

なぜ外国で芥川作品が読まれるのか。それはやはり、一九五〇年の黒澤明の映画『羅生門』の影響力が大きい。この作品がベネツィア映画祭で金獅子賞、アカデミー賞名誉賞を受賞し、芥川龍之介という名前や「羅生門」という言葉が、海外に広く知られることになりました。

映画『羅生門』の内容は小説「藪の中」をベースにしたものですが、これがきっかけになって、小説「羅生門」も海外で読まれるようになったのです。実は内容的にも、孤独とか、不安とか、不条理とか、不可解、エゴイズムといった、小説「羅生門」に重なる要素を、「藪の中」や映画『羅生門』は内包していました。黒澤映画『羅生門』は、以後の芥川研究の展開を先取りしていたともいえるかもしれません。

■失恋事件が生んだ「羅生門」

――「羅生門」研究の展開や最新の研究成果について教えていただけますか。

近年、芥川に関する新資料が次々出てきています。ことに芥川の一高時代からの親友、恒藤恭[*5]の日記は、当時の芥川を知る上で大変重要な資料です。

「羅生門」の初出は大正四(一九一五)年一一月号の『帝国文学』ですが、成立時期に関しては、前年大正三年の秋ではないか、あるいは大正四年の春ではないかなど、諸説ありました。ところが、恒藤恭の日記が出てきて状況が一変したのです。

この日記には、芥川が大正四年の八月に、恒藤恭の故郷、島根県松江に二〇日あまり旅をしたとある。芥川はその年の春、吉田弥生という幼なじみの女性と結婚したいと、養父と母親代わりであった叔母フキに申し出たところ、猛烈な反対を食らい、大きな打撃を受ける。彼は恒藤恭を含む親しい友人三人にその悩みを手紙で書き送っています。恒藤は芥川の悩みを癒やしてやりたいと、松江に招きました。

芥川は恒藤に旅のお礼の手紙を書いていますが、その手紙の落書きの文字などと「羅生門」とが重なってくるんですね。このことから、「羅生門」は一〇〇年前の八月の終わりに、松江から帰ってきて書きはじめ、九月には完成したと推定できるのです。

当時芥川は、才色兼備の女性、吉田弥生との結婚がかなわず消沈していた。そうした失恋のやりきれない思いを乗り越えるために、人間のエゴイズムを凝視し、生きるためにはどうするべきかという問題を追究した小説「羅生門」を書き、一方で同時期に、愉快な「鼻」という小説を書いた。そう考えられるわけです。

■徳冨蘆花「謀叛論」と「羅生門」

――当時の芥川が置かれていた状況、世相はどのようなものだったのでしょうか。

一九一〇年、幸徳秋水らが逮捕・検挙された大逆事件が起きました。社会主義者・無政府主義者への弾圧事件ですね。これを受けて、徳冨蘆花は一九一一年二月一日、第一高等学校の講演会で、政府を批判する演説を行いました。芥川が一高に入学して五か月後のことです。演題は、「謀叛論」という衝撃的なものでした。[*6] 当時は検閲の関係で公表されなかったのですが、戦後、多くの人々がこの演説について回想を書き、当時の学生たちへの影響の大きさがわかってきました。新資料が出てくるに及んで、この「謀叛論」が「羅生門」に与えた影響も浮き彫りになってきたと思います。

この演説を芥川が聴いたか否かも論議になってきました。私は当初から、芥川は聴いていただろうと考えていま

(5) 恒藤恭=旧姓、井川。大阪市立大学の初代学長。芥川没後『旧友芥川龍之介』を上梓。近年、大阪市立大学の恒藤記念室に、芥川の書簡や恒藤の日記が寄贈された。一高時代の日記は『恒藤恭 一高時代の日記』として大阪市立大学大学史資料室から出版(二〇〇二年三月)。

(6) 演説の草稿は岩波現代文庫『謀叛論』などに収録。蘆花は、自分は幸徳秋水らと立場を異にするとしつつも、彼らを処刑した政府を激しく批判し、「謀叛を恐れてはならぬ。謀叛人を恐れてはならぬ。自ら謀叛人となるを恐れてはならぬ。新しいものは常に謀叛である。」と結論している。当時としては衝撃的な内容であった。

した。ところが、芥川が「聴いた」という言及、日記なり文章なりが出てこない限りはそんなことは言えないという意見が強く、私の意見は少数派でした。そこで、実証的に芥川の周辺を調べてみようと考え、調べていくうちに、当時の一高生の日記の記述が多く出てきたのです。

まず、矢内原忠雄、芥川の同期で法科の学生の日記です。一九一一年二月一日に蘆花の演説を聴いたと感慨をこめて書いている。そして、先ほども出てきた恒藤恭の日記では、一九一一年二月一日に大学ノートにぎっしりと蘆花の演説内容を書き連ねている。それから、理科の学生、森田浩一。早く亡くなった人ですが、入念な一高時代の日記を遺し、演説の二日後の二月三日に行われた全学集会についての感想が詳しく書かれています。新渡戸稲造校長が全校生の前で、「あの演説にとらわれてはいけない」というようなことを話した。誰かが、「授業をやっても落ち着きませんので休みにしてください」と言った、などと詳細が書いてある。森田自身は演説を聴いていないけれど、友人たちから聞き、学内の空気を感じ、新聞を読み、大きな印象を受けて全校集会に出、その感想を日記に記したわけです。

こうした状況を考えますと、恒藤恭と親しかった芥川が演説を聴いていた可能性は高いし、また、直接聴いていなくても、友人との会話や全学集会などから内容を知り得たでしょう。芥川が蘆花の演説から影響を受けたことは否定できないと思います。

「羅生門」で下人は、「では、おれが引剝をしようと恨むまいな。おれもそうしなければ、飢え死にをする体なのだ。」と言う。これは、「謀叛論」の「謀叛を恐れてはならぬ。我々は生きねばならぬ。それには謀叛しなければならぬ」に通じる。下人のことばはまさに、〝謀叛弁〟であると言えるのではないでしょうか。

■国民教材としての「羅生門」

――「羅生門」が国語教科書の定番となるまでには、どのような経緯があったのでしょうか。

「羅生門」と同時期に書かれた「鼻」も、昔はよく教科書に入っていました。しかし、昭和四〇年代、身体の一部である赤鼻を笑うのは差別につながると批判された。それで「鼻」は一斉に採録されなくなってしまった。そこで、「羅生門」が浮上してきたのです。「羅生門」は盗人の話ですから、戦前はもちろんのこと、戦争中は教科書で扱うことなど考えられませんでした。戦後、芥川研究が盛んになり、「羅生門」が盗人のエゴイズムだけではない、さまざまな側面を内包している作品であることがわかった。そして研究に携わった方々が教科書編纂にも携わるようになり、「羅生門」が入ってきたのです。

さらに、二〇〇三（平成一五）年四月から高校のカリキュラムが変わって、「国語総合」という新しい課目が誕生してからは、全社の教科書を席巻しました。高校進学率が一〇〇パーセントに近づいている現代では、この国の一五、六歳の少年少女のほとんどが、芥川龍之介という作家を教科書から知るわけです。「羅生門」はまさに「国民教材」になったと言えましょう。今日、「羅生門」発表後一〇〇年ということが意識されるようになったのも、教科書の影響があるからこそでしょうね。

――「羅生門」で授業をする国語の先生方や「羅生門」を学ぶ高校生たちに、伝えたいことはありますか。

高校の先生方にも、できるだけ最新の芥川論を知っていただきたいと思います。古い「羅生門」論は、否定的な論調が多い。簡単に言えば、「羅生門」は暗い作品である、自死した作家の作品である、などと。このように否定的に扱われますと、生徒の側も作品に対してそういう意見をもってしまいます。これまで述べましたように、別の側面も大きいわけですから、先生方には、「羅生門」の書かれた時代背景を知り、新しい芥川龍之介観をもっていただきたい。

そして、高校生には、「羅生門」から他の芥川作品に目を向けて、そのおもしろさに気づいてもらいたいですね。私が高校生だった頃、仲のいい友人が当時出たばかりの筑摩書房版『現代日本文学全集　芥川龍之介』の一冊を示して、その中の「地獄変」を、「これがいちばんおもしろかった。おまえも読め」と言ってきた。それで読んでみたところ、非常に感銘を受け、全集読破へ進んでいうという体験があります。

高校の先生方には、新資料に導かれた読みの必要性をぜひ知っていただき、「『羅生門』にはいろんな側面がつまっている、それは他の作品を読むとよくわかる。『地獄変』などどうだろうか」というふうに、生徒の視野が広がるような導きをしてほしいものです。

■読解から表現へ――現実の転位としての文学

小説は、一度書かれると作家の手を離れて自立するものです。そして、国語教育としては自立した作品を読むわけです。しかし一方で、テクストは、作家の現実が転位したものであることも意識しなければなりません。

「羅生門」という小説は、芥川が自分の抱えていた問題を投げ込んでいる作品です。私小説作家のようにストレートに表現しているわけではありませんが、虚構に託して作者のやりきれない現実の思いが反映されている。そういうことをふまえて、読解だけで終わらずに、虚構の作文指導へと展開されるのはどうでしょう。

「あなたも今抱えているやりきれない気持ちを、芥川のように作品として書いてごらん」と、表現指導につなげていくのです。芥川がやりきれない気持ちを作品に転位したように、高校生たちにも今抱えているやりきれない思いを虚構の作文に託すように勧めるのです。それは、いじめの問題であるかもしれない。両親との問題や、兄弟との問題であるかもしれない。あるいは社会に対する不満の思いがあるかもしれない。そうした思いを大ひねりにひねって作品として表してみなさい、と。そんなふうに指導するのも、おもしろいんじゃないでしょうか。

――本日はありがとうございました。

（二〇一五年九月二日　大修館書店にて）

特集◉羅生門一世紀

「羅生門」誕生前夜
――下人の人物造型と現代

高橋龍夫（たかはしたつお）
専修大学文学部教授

芥川龍之介が「羅生門」を『帝国文学』に発表したのは、大学卒業を半年後に控えた一九一五年一一月のことだった。その約一年半後、英語教師として横須賀海軍機関学校に赴任中の一九一七年五月には、単行本として初めて短篇集『羅生門』を阿蘭陀書房から出版する。そして同年六月二七日には、日本橋のレストラン「鴻の巣」で『羅生門』出版記念会が開催される。佐藤春夫が発起人で、『新思潮』のメンバーはもとより、谷崎潤一郎、岩野泡鳴、日夏耿之介、谷崎精二、滝田樗牛、江口渙、有島生馬、豊島與志雄、和辻哲郎、小宮豊隆など錚々たるメンバーが名を連ねた。「星が一つ輝いていた」（『ある阿呆の一生』「十一　夜明け」）と自ら回想したように、白い背広を身にまとい若干二十六歳の都会派の新進作家芥川龍之介の輝かしい門出であった。会の終りに「鴻の巣」の主人に揮毫を求められて、芥川は「本是山中人」と書した。「山中」とは芥川の実父・新原敏三の故郷、山口県玖珂郡生見村（現・美和町）とするのが通説である。新原敏三は明治維新前後に十代で家出し長州藩農兵隊に参加して負傷するなど、気性の激しい果敢な人物であった。上京後は進取の気性に富んだ手腕が渋沢栄一の信頼を得て、牛乳販売（耕牧舎）の管理者として築地本店等を任されることになる。芥川は、出版記念会の数日前に、海軍機関学校の航海見学で軍艦に乗船して山口県由宇と岩国を訪れており、まさに実父の故郷を間近にしている。「本是山中人」とは、繊細で気どりある都会人としての芥川とは別の一面、実父の血を引く剛健で生命力に満ちあふれた野性的な側面を自覚的に表明したと見ることができるのである。

「羅生門」は、平安末期の荒んだ京都を舞台に、解雇された若き下人が明日の糧に悩む設定であるが、思えば、明治維新前後の戦乱の革命期に若き敏三が単独で時代に果敢に格闘した姿にも重ねてみることが可能かも知れない。それはともかく、「羅生門」の前半は、晩秋の夕暮れの雨模様にも感化される「Sentimentalisme」を有する若き下人が門の楼の上で展開する光景に釘付けとなり、好奇心と恐怖の感情が外界と一体化する状況が巧みに描き込まれている。光景に密着した下人の行動は「猫のように身をちぢめ」「守宮（やもり）のように足音をぬす」むなど、動物によって野性的に比喩される。「死骸の腐爛した臭気」にも「次の瞬間には、もう鼻を掩う事を忘れ」「ある強い感情が、ほとんどことごとくこの男の嗅覚を奪ってしま」い、「六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れ」るほど、心身共に目前の光景と瞬時に連動しつつ現場を直情的に体現する。同じく、死人の髪の毛を抜く老婆も「猿のような」「猿の親が猿の子の虱（しらみ）をとるように」と動物に喩えられ、下人の「老婆に対するはげしい憎悪」は「あらゆる悪に対する反感」となり「悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片（きぎ）れのように、勢いよく燃え上り出」す。ここに理性的な判断は忘却され、野性的で原始的、動物的で直情的な下人と老婆の生々しい世界が照射されている。「合理的には、それを善悪のいずれに片づけてよいか知らなかった。しかし下人にとっては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を抜くと云う事が、それだけで既に許すべからざる悪であった。」――こうした倫理と潔癖に彩られた憎悪が激情として湧き出る下人の態度は、論理や儀礼による洗練された都会的な姿勢とは対照的であり、だからこそ門の上の世界での下人の行動は「いきなり、梯子から上へ飛び上」がるほど素早く衝動的でもある。

『今昔物語集』の文学史的価値が近代に入って認められた契機には、「羅生門」や「鼻」の典拠として『校注国文叢書　第一六巻　今昔物語上巻』（一九五・七　博文館）を用いた芥川の功績によるところが大きい。芥川は後年、「今昔物語観賞」（一九二七・四　新潮社刊『日本文学講座』第六巻所収）において、『今昔物語集』の魅力を次のように語った。

『今昔物語』の芸術的生命は生ま々々しさだけには終わってゐない。それは紅毛人の言葉を借りれば、brutality（野性）の美しさである。或は優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさで

ある。

この「生まゞゝしさ」「brutality（野性）の美しさ」に価値を見出す芥川の視線は、先の「羅生門」の下人の人物造型に直接的に反映されている。まさに都会的な「優美とか華奢とか」とは正反対の「本是山中人」に相応しい人間像なのである。

芥川が学生時代から『今昔物語集』に野性の美しさを見出した背景には、さらに別の側面も看取される。芥川は、「羅生門」執筆中の一九一五年前後には卒業論文に着手していた。テーマはイギリスの芸術家、ウィリアム・モリスである。モリスは、詩人、デザイナー、社会主義者、小説家など多彩な面を持っていたが、その軸となる思想は、イギリス産業革命後の近代文明に拮抗する形で、終生、中世の美術、建築、書物にその美しさを求め、中世の人々の信仰に生きる姿に憧憬を抱くなど、中世を一つの理想と目していた。一九世紀末には、日本でもよく知られたフランスの彫刻家オーギュスト・ロダンも中世を芸術的に標榜したが、文明に行き詰まった一九世紀末の西欧社会に対して同時代の芸術家達による中世回帰が一つの指標となっていたことは注目に値する。『今昔物語集』を評価した若き芥川は、モリスやロダンの中世回帰の視座を共有していた。

加えて、一九一〇年代は日本でもフォービズムが流行していた時期でもある。フォービズムは、主観や感覚に基づいた原色の大胆な使用、輪郭線の強調など、二〇世紀初頭のフランスを中心に流行した野性的で生命力溢れる絵画運動である。日本では「野獣派」ともいわれたが、学生時代の芥川はフォービズムの先駆者とされるマティス、同じく後期印象派のゴッホ、西欧文明から離脱しタヒチに渡ったゴーギャンなどにも強い関心を示していた。日本では一九一二年に岸田劉生、木村荘八、万鉄五郎などが参加したフュウザン会によってフォービズムの作風が美術運動として展開されたが、芥川もフュウザン会の展覧会には足を運んでいる。まさに、「羅生門」誕生前夜には、自ら「山中人」の血を自覚するのみならず、こうした中世回帰に伴う素朴で生々しい生き方、人間に内在する野性の美しさやそれを描出する原色の再発見といった、一九世紀末から一九一〇年代にかけての国内外の芸術思潮の動向と多分に連動していたのである。

しかし、それだけではない。一九一〇年代は大逆事件に端を発する〈冬の時代〉とされるが、それに抗するようにベルクソン哲学を軸とする大正生命主義が流行する。その先駆とされるのが社会運動家の大杉栄である。大杉は一九一二年に『近代思想』を創刊し文壇の注目を浴びた。『近代思想』上で展開した大杉の主張に着目すると、例えば、「民衆の精神が原始的状態に復帰して、総てが本能的となり又詩的となる」（「本能と創造」一九二二・一〇）ことを提唱したり、「服従を基礎とする今日の一切の道徳は、要するにこの奴隷根性のお名残りである」（「奴隷根性論」一九二三・二）と権威への盲従を批判したりする。さらには「憎悪美と反逆美との創造的文芸」（「征服の事実」同・六）の出現を要求し、「憎悪が生ぜねばならぬ。憎悪が更に反逆を生ぜねばならぬ。」「徹底せる憎悪美と反逆美との創造的文芸が現はれないのか。」（「生の拡充」同・七）と繰り返し主張する。こうしたラディカルな言説は、服従していた主人から解雇され、本能的な行動の中で原初的な憎悪を噴出させた下人の人物造型を容易に想起させよう。『近代思想』は芥川の属する『新思潮』とも雑誌を通して交流があり、芥川もこうした論調には熟知していた。ちなみに一九一〇年には、「謀叛論」と題する徳冨蘆花の一高での講演を芥川も聴講したとされており、下人が衝動的にあらゆる悪に反感を抱くその姿勢は、若き人間のもつ原始的、根源的な人間性の証として、〈冬の時代〉に拮抗する徳冨蘆花や大杉栄などの社会的言明に対する、学生時代の芥川なりの誠実な文学的応答ではなかったか。

だが、近代化の時代にそうした衝動だけでは人は生きていけない。老婆は自己弁護とも欺瞞ともいえる言葉による論理で自らの行動に合理付けを行う。下人は、着物を剝ぐという象徴的な行為によってそれを逆手にとり闇の中に消えていく。まさに、原始的、野性的な「憎悪美」「反逆美」を体現しつつ、さらに時代と対峙するための武器としての言葉を獲得して、同時代に自立していくのだといえよう。

「羅生門」は、原初的な人間性の自己確認と、言葉による時代への参入の覚悟を潜在させた「創造的文芸」といえる。芥川にとって、言語芸術による同時代への所信表明であり、かつ、人間性回復が日々芸術的態度なのである。だとすれば、システム社会の強固になりつつある二一世紀の現代においてこそ、「本是山中人」の精神を貫く下人の人物造型が改めて瞠目に値しうるのではないだろうか。

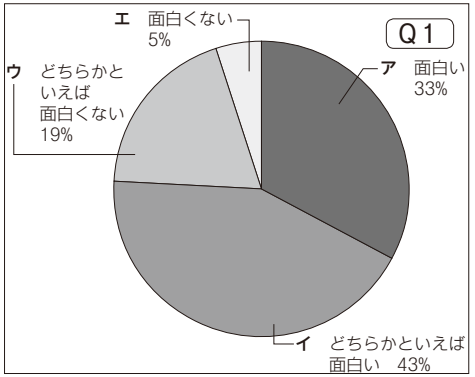
高校生アンケート

「羅生門」は本当に面白い？

今どきの高校生は、「羅生門」という作品やその授業にどんな印象をもっているのでしょうか。約九〇〇人の高校生にアンケートで聞きました。

「羅生門」の印象

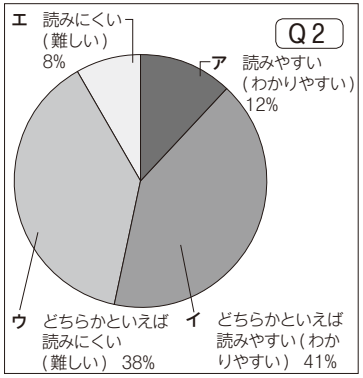
【Q1】芥川龍之介「羅生門」は、面白い作品だと思いますか？



まず、「羅生門」を面白いと思うかどうかについて、理由とともに答えてもらいました。「面白い」または「どちらかといえば面白い」と答えた人は合わせて76％で、理由には、「予想を裏切る展開があるから」「結末がかっこいい」「善が悪に変わる瞬間をとらえていると思うから」「下人の心情の変化が面白い」「人間のエゴがよく描かれているから」「表現の仕方が面白い」「情景描写が心情と関係しているところが面白い」「世界観が好き」などが挙げられました。「どちらかといえば面白い」と答えた人の理由には、「難しいが、読んでいるうちに内容を理解できたから」というものもありました。

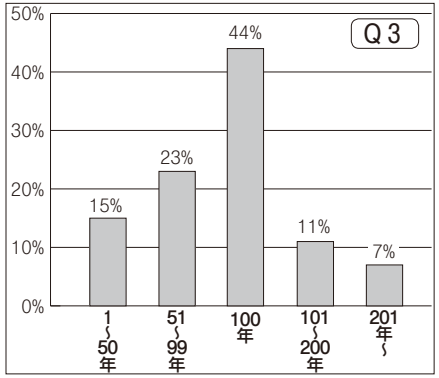
「どちらかといえば面白くない」「面白くない」と回答した人は、合わせて24％で、その理由には「内容が難しいから」「登場人物に共感できないから」「怖いから」などがありました。

【Q2】「羅生門」の文章は、読みやすい（わかりやすい）と思いますか？



「読みやすい（わかりやすい）」と答えた人は12％にとどまりましたが、「どちらかといえば読みやすい（わかりやすい）」との合計では、「読みにくい（難しい）」「どちらかといえば読みにくい（難しい）」の合計をわずかながらも上回りました。

【Q3】「羅生門」が書かれてから、何年くらい経っていると思いますか？



「（　）年」の（　）を埋めてもらう形式で、理由とともに答えてもらいました。

最も多かった回答は、正解の「100年」で、割合も44％にのぼりました。理由には「芥川は大正時代の人だから」「大正時代の作品だから」「平成＋昭和＋大正＝約100年だから」など、作者の生きた時代や作品の成立した年代を踏まえたものが多く見られました。「先生から教わった」「国語便覧に載っていた」などの答えもありました。

200年以上と回答した人の多くは、「下人が刀を持っているから」「着物が出てくるから」など、作品の舞台の年代を参考にしているようでした。

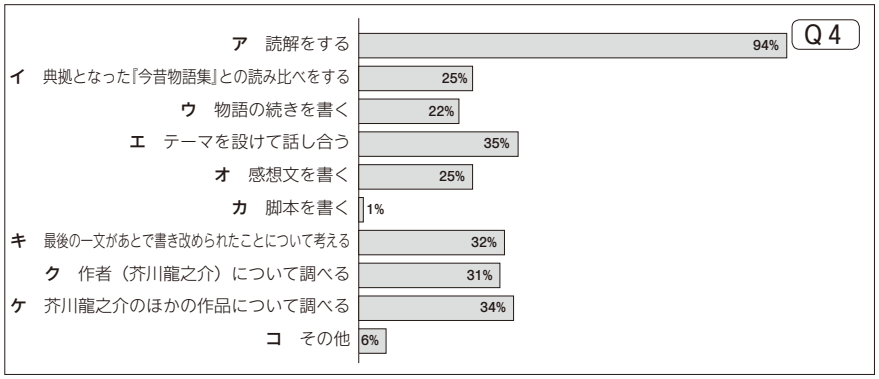
また、50年以下と答えた人の理由には「古そうだから」がかなり多く、高校生たちが「50年前は昔」ととらえていることが垣間見えます。

授業を受けて

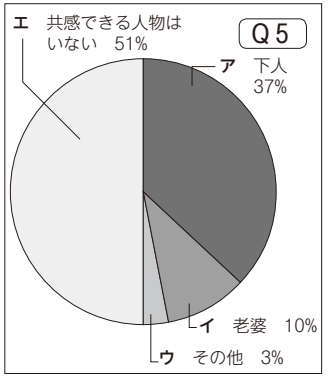
【Q4】「羅生門」の授業では、どんなことをしましたか？（複数回答可）

やはり読解という回答が最も多く寄せられました。

「その他」には、「芥川のほかの作品を読んで感想を書く」「下人や老婆の姿を想像して絵を描く」「ポップ広告を作る」「疑問点を出し合い、それについて調べて班ごとに発表する」「場面を再現して写真を撮る」（→P.36の実践を参照）などがありました。



【Q5】「羅生門」の登場人物のうち、あなたが最も共感できるのはどの人物ですか？



「下人・老婆・その他・共感できる人物はいない」の四択で、理由とあわせて聞きました。

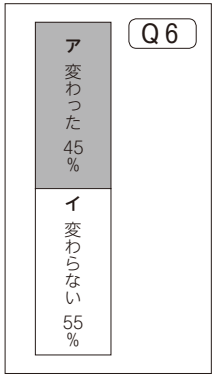
「下人」と答えた人は37％で、理由には「自分も下人の立場だったら同じような行動をするかもしれないから」「下人の葛藤がわかる気がするから」「年が近いから」など、下人に自分を重ね合わせたものが多いようでした。

「老婆」と答えた人は10％で、「生きるためなら自分もそうするかもしれないから」「追いつめられたとき自分を正当化するところが人間らしいと思ったから」などの理由が挙がっています。

「共感できる人物はいない」と答えた人は約半数でした。理由には「みな行動が普通ではない」「下人や老婆のような状況に置かれたことがないから」などがありました。

また、「その他」には、「全員：下人がしたことも老婆がしたことも、生きるためには仕方がなかったから」などのコメントがありました。

【Q6】初めて読んだときと授業を受けた後とで、「羅生門」の印象は変わりましたか？



「変わった」と「変わらない」がほぼ半々という結果になりました。

「変わった」と答えた人に、どのように印象が変わったかを尋ねたところ、「最初はどういう話かよくわからなかったけれど、授業を受けて、奥が深い話だなと思った」「ただの下人の盗み話ととらえていたが、その中に多くのメッセージがあることがわかった」「表現が難しいと思っていたが、授業を受けてからは色の表し方がすごいと思った」などの回答が集まりました。

【Q7】「羅生門」で、最も心に残った場面や文を教えてください。

自由記述で回答してもらいました。

最も多かった答えは「老婆が死人の髪の毛を抜いているところ」でした。確かに、インパクトの強い場面です。「下人が老婆の着物を剝ぎ取るところ」「下人の心が変わるところ」「下人と老婆が出会うところ」「最後の場面」などの回答も多く見られました。

心に残った文には、「下人の行方は、誰も知らない」「この髪を抜いてな、この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ」などが挙がっています。

【Q8】「羅生門」の授業について、思い出のエピソードがあれば教えてください。

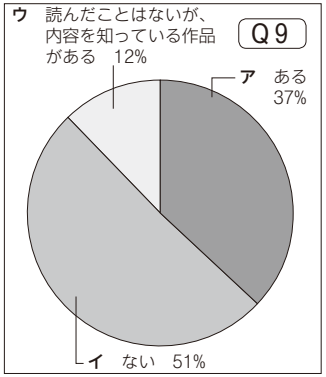
たくさんのエピソードが集まりましたが、ここではその一部を紹介します。

- 物語の続きを作るという授業で、友達のストーリーが面白かった。
- 先生が登場人物になりきって読むのがよかった。
- 議論が熱くなって大変だった。
- テーマごとに、班で話し合って発表したこと。
- 「羅生門」というタイトルの意味について考えたこと。
- 初版本のレプリカを見て、一番最後の文が違うのを確認したこと。
- 教育実習の先生が面白かった。
- 一つの文章を丁寧に理解していく楽しさを感じた。
- 作者がなぜ結末を変えたのか考えるのが面白かった。

どのエピソードからも、授業の盛り上がりや、興味をもって取り組んでいる生徒たちの姿が想像できます。

芥川龍之介について

【Q9】芥川龍之介の、「羅生門」以外の作品を読んだことがありますか？



「ある」「読んだことはないが内容を知っている作品がある」と答えた人には、その作品名も聞きました。

読んだことがある作品のベスト5は、①「蜘蛛の糸」②「鼻」③「杜子春」④「トロッコ」⑤「地獄変」でした。

読んだことはないが知っている作品でも、「蜘蛛の糸」が一番多く、「鼻」「地獄変」「河童」「杜子春」……と続きます。

【Q10】芥川龍之介について知っていることを教えてください。

最も多かった答えは「自殺した」でした。また、アンケートの実施期にちょうど芥川賞の発表があったこともあり、「芥川賞」という回答もかなり多く見られました。

そのほか、「イケメン」「ぼんやりとした不安」「養子として育った」「夏目漱石の弟子」「命日は『河童忌』」などさまざまな答えが集まりましたが、中には「『吾輩は猫である』の作者」「何度も心中しようとした」など、「人違いでは？」というような回答もありました。

今回のアンケートは、九〇四名の高校生にお答えいただきました。ご協力くださった学校ならびに先生方には、謹んで御礼申し上げます。

- 愛知県立蒲郡高等学校
- 岩手県立一関第二高等学校
- 岐阜県立大垣東高等学校
- 滋賀県立守山高等学校
- 千葉県立千葉高等学校
- 筑波大学附属高等学校
- 筑波大学附属坂戸高等学校
- 麗澤高等学校

＊アンケート結果の詳細は、「WEB国語教室」でも公開予定です。

特集◉ 羅生門一世紀

「羅生門」はなぜ共通教材になったのか

武藤清吾（むとうせいご）
琉球大学教育学部准教授

■映画『羅生門』の受賞

二〇一三年度から高等学校で使用される国語教科書『国語総合』のすべて（九社二三種）に「羅生門」が収録された。この状況は前回の改訂（二〇〇三年度）も同様であった。一九八二年度の改訂でもほとんどの教科書に収録されていたことを考えると、「羅生門」が共通教材として認識されるようになってすでに三〇年以上が経過したということになる。

芥川龍之介と「羅生門」が国際的に知られるようになったのは、黒澤明監督映画『羅生門』がヴェネチア国際映画祭金獅子賞（一九五一年）を受賞したことがきっかけであった。前年の国内上映で好成績を残せなかったものの、翌年の映画祭で日本人初の金獅子賞を受賞したのであった。当時の日本は、アジア・太平洋戦争での敗戦による社会的混乱と生活苦のなかにあり、連合国総司令部（GHQ）の占領政策下での政治的市民的権利の抑圧が続いていた。そうした状況での国際的映画祭での受賞という明るい話題であったため、湯川秀樹博士のノーベル物理学賞受賞（一九四九年）とともに国内外で大きな注目を集めた。監督の黒澤明、主演の三船敏郎、京マチ子とともに、芥川龍之介の名も世界的に認知され、多くの読者を獲得していった。

脚本を担当した橋本忍が『複眼の映像　私と黒澤明』（文藝春秋社、二〇〇六年）で明らかにしているように、映画『羅生門』は度重なる試行錯誤を経て芥川の原作「羅生門」の枠組みを借りながら「藪の中」を映画化したものである。原作とは内容も大きく違うわけだが、映画の題名に採用され、それが国際的な受賞を果たした影響は大きかった。

黒澤はその後も『生きる』がベルリン国際映画祭ベルリン上院特別賞（一九五四年）、『七人の侍』がヴェネツィア国際映画祭銀獅子賞（同年）を受賞するなど、国際的な映画監督としての評価が定着する。

映画『羅生門』の国際的な評価とその後の黒澤の活躍によって「羅生門」の話題性は継続され、これが国語教科書に収録される契機になったと、まずは考えられる。

■高校教科書の開拓と文学教育研究の進展

「羅生門」が明治書院など三社の国語教科書に初収録されたのは、一九五七（昭和三二）年である。ただし、明治書院版は近代小説研究という単元、他の二社も選択科目教科書への収録であり、編集者が試みに入れたという感じが否めない。翌年の三省堂版収録後も、一九七二年まではわずかな教科書のみが教材化していたに過ぎない。この間には、「戯作三昧」「鼻」「舞踏会」が収録されていた。状況が変わったのは一九七三年の教科書改訂時である。一九七三年から八一年版で「鼻」が一社のみに激減する一方で、「羅生門」は九社が収録するようになった。

この推移を見ていくと、映画『羅生門』の話題性もあって教科書に入れたものの、その時点ではどう教えるかについてまでは十分考慮されてこなかったため、その後の収録も躊躇されたことがわかる。

そもそも新制高等学校は、戦後教育改革のもとで中学校教育を基礎に高等普通教育、専門教育を行うことを目的に新設されたものである。まだ学校経営や教科の指導も模索続きであった。国語の教科書を見ても文部省編『高等国語』が刊行されたが、その内容は戦時に対応した教材を外し定評のあった作品を収録した簡易なものに過ぎなかった。

一九四八年より民間から教科書が刊行されるようになって教科書の体裁が整い始める。二分冊の『新国語　ことばの生活』『新国語　われらの読書』（三省堂）、金田一京助編『高等国語』（三省堂）、各巻冒頭に詩・序詞を置いた『高等国語』（大修館）、柳田国男編『国語』（東京書籍）、志賀直哉編『高等学校国語』（好学社）、各学年一冊で中国文化や漢文、日本古典に重きを置く『高等国語　総合』（明治書院）など、特色のある教科書の刊行が続いた。一九五一年までに二四社が四八種の教科書を刊行している。

この時期の教科書の特徴は、単純に作品を並べる雑纂式編集から学習内容別に作品配列にまとまりを持たせる単元別編集に変わったことである。「時代と社会」「人類と文化」「中国文学と日本文学」など

のまとまりごとに作品を配列して、そのまとまりで何を学ばせるかを明確にする努力が始まったのである。つまり、各教科書会社は、そのまとまりや作品配列に特色を持たせる工夫を重ねたのである。単元編成に習熟してくると、次には収載する作家・評論家、その作品の選択に目が移ってくる。それが一九六〇年代の教科書編集である。話題性のある小説を収め、学び手に文学を読む楽しみを提供する努力に一段と力が注がれるようになった。

一方で、この時期には文学教育に関する実践報告や研究が相次いだ。「考え・感じとり・創り出す文学教育」(益田勝美)、「問題意識喚起の文学教育」(荒木繁)、「準体験の文学教育」(熊谷孝)、「状況認識の文学教育」(大河原忠蔵)、「十人十色の文学教育」(太田正夫)、「関係・認識変革の文学教育」(西郷竹彦)などがすぐに思い浮かぶ。これらは、個々の教育現場で生徒とともに格闘した文学教育を基礎に提案されたものばかりであった。時代の状況を乗りこえ、生徒が人間的に成長発達する保障を生み出すための教育として文学教育が自覚された時代であった。その詳細は、浜本純逸『戦後文学教育方法論史』(明治図書、一九七八年)、田近洵一『増補版 戦後国語教育問題史』(大修館書店、一九九九年)に詳しい。

■「なぜ、今芥川文学か」の問い

文学教育研究とともに芥川文学研究にも大きな進展があった。一九七〇年前後から芥川文学について発言してきた熊谷孝は、「なぜ、今芥川文学か」(『芥川文学手帖』みずち書房、一九八三年)で、一九六〇年代までの芥川文学研究に見られた「絵解きの作家・作品論」を批判する。それは、文学的出発点から我執に憑かれた生の恐怖と人間不信のニヒリズムに陥っていた芥川について語り、結局は自殺の道を歩む姿を、その文学の展開を通して「解釈」するという絵解きの仕方であると熊谷は言う。

そして、「羅生門」について、下人や老婆を含む「すべて何らかそのような疎外状況に置かれている自己の主体の確認において、疎外の人間的・社会的根源をそこに問い続けようとしている」と作品の意義を述べている。芥川にとっての歴史小説とは、「現在を過去の局面に投影し、逆にそのことで現在的現実像の持つひずみを、的確な遠近法と適切な距離感において自意識にもたらす、という方法であった」と評価するのである。

熊谷孝をはじめ、三好行雄が、のちに作品論として体系化する端緒となった「『羅生門』〔鑑賞〕」(『解釈と研究 現代日本文学講座 小説5』三省堂、一九六二年)を発表するなど、芥川研究でも「絵解きの作家・作品論」を克服する動きが始まっていたのであった。

■「羅生門」の多彩な文学教育実践の蓄積

『月刊国語教育』一九九二年三月号(東京法令出版)が芥川生誕百年記念「芥川文学の教材化への挑戦——新しい読みと指導法」という特集を組んだ。

座談会で安居總子が、「徒然草」を読んでまとめさせたレポートで「『徒然草』に出てくるいろいろな事柄と『羅生門』のことが重なり合う」と書いてきた生徒がいたことを報告している。生徒は「死人がこんなにたくさんいる中で生きていかなければならないということを考えると、あの時代、こんなふうに物事を考えるのはかなり普通のことだったんじゃないだろうか」と書いており、安居は「テーマ性だけを追うのではなく」、「時代から人間を考えていくような読み」を大切にしたいと述べている。

同誌には伊藤一郎「多彩な『羅生門』の実践に学ぼう」が掲載されている。伊藤は「一九八七年五月までの「『羅生門』教育関係主要文献目録考」(『言語と文芸』一〇一号)に五三件の文献を収めたことを報告し、「『羅生門』の授業を中心にして実践報告数が、他の作品を対象としたものに比べ、群を抜いているのは間違いない」と評価している。

伊藤は、その中から一二編の報告を紹介している。長嶺力夫「小説の指導——羅生門の形象読み」、光本光徳「問題発見学習と課題学習——『羅生門』の学習を通して——」、日向福「羅生門の読解指導——初発の感想を起点として——」などが国語教育雑誌や大学紀要に収録された。他の作品の実践例は「『羅生門』の実践に比して変化にやや乏しい」と感想をまとめており、現場の教師にはすでに「羅生門」への関心が深まってきている印象がある。教科書収録の早い時期から、文学教育に意欲的な教師たちの手で多彩な実践が積み重ねられてきていたことがうかがえる。

このように、映画『羅生門』の受賞を契機に教科書収載が意識され始めるようになり、時代と人間を見つめる意欲的な文学教育実践と文学教育理論の発展、芥川文学研究の進展が「羅生門」を共通教材としたと考えることができる。

特集◉ 羅生門一世紀

「羅生門」を再生する〈読者〉

阿部寿行（あべとしゆき）
武蔵高等学校中学校教諭

■「羅生門」解釈の軌跡

「羅生門」という作品がこの世に出て、すでに一世紀。多くの作品が読み継がれずに消え去る中で、本作が今日まで命脈を保ってきたのは、驚くべきことである。勿論そこには教科書教材として採録され一種の国民文学となり得たことなど、外的要因も多分に関わっている。とはいえ、これまで五百以上の論及が提出され、未だに新しい観点が生まれ続ける本作は、優れた「テクスト」ほど様々な読みの方法に耐え得る、との土方洋一[1]の指摘を肯わせるものだ。

「羅生門」の「読み」の実践という点で見ると、これまで多くの方法が試みられてきた。初出発表時、文壇から黙殺された本作に対しては、戦後一九四〇年代の吉田精一[2]の「エゴイズムをあばい」たものとの主題考察を基軸とし、七〇年代には三好行雄[3]の「限界状況に露呈する人間悪」との指摘、八〇年代の、下人の姿に「自己解放の叫び」を読み取った関口安義[4]など、テーマ考察を主流とする読みが多く挙げられてきた。一方で舞台となる羅生門の異空間としての「場」に着目した平岡敏夫[5]、語り手の位置や言説に注目した三谷邦明[6]、典拠との異同から論じた長野甞一[7]等、多面的に問題を炙り出す考察も枚挙に暇がない。また「羅生門」のテキスト自体が孕む、教材価値としての適否を論じる田近洵一[8]の論など、学校教材としての本作に目を向けたものも数多い。

こうした百花繚乱ともいえる「羅生門」論創出の論点は、すでに浅野洋[9]が「多彩な『意味』（多義性）の前では『作者』の『意図』によって確定される『意味』も揺らぎ、痩せ細ってゆくかに見える」と指摘する通り、「作者の意図」という範疇を超えている。その意味で「作者」は現在、テキスト内の機能としてとは別に、その実史的存在自体が、読まれるべき文学現象（テキスト）となったと言うこともできよう。見方を変えれば、時代規範（パラダイム）の変遷とともに、読みの主体である「読者」の側が、「羅生門」というテキストにどのような意味づけを求めてきたか、謂わば「読者による解釈の変遷史」としての側面が、この多様性を生んだとも言える。そしてこの場合の「読者」には、現代の教室という場の読み手たる「生徒」「教員」も、その一翼を担う存在として位置づけられる。

■共同体験としての「読み」のプロセス

教材としての「羅生門」の読み手である「生徒」の属性を考えてみたい。例えば一般的な教養や娯楽を目的とする「読者」なら、多様に表現を解釈し、その内容を恣意的に再構成する自由を持つだろう。しかし、授業で扱われる「羅生門」は、前提となる学習として、「読み」の過程における言葉の使い方や意味、表現の効果など、言語的な知識習得がなされた上で、論理的な解釈過程の共同検証が求められるものだろう。言語経験的に未成熟であるということは、語義の検証・表現分析の根拠など客観性を基盤とした共通理解がなければ、独りよがりな感想で終始してしまうということでもある。教室では、教員も含む複数の読み手による読解が共同体験される以上、テキストが包含する要素が、どのような読み（プロセス）に論理的に結びつくのか、その理解への過程を常に共同検証する手続きが必要不可欠となる筈だ。

とはいえ、共同検証の過程と言っても、それは「読み」の最終地点を必ず主題考察に据えるべき、というわけではない。従来の授業等では、結論的なニュアンスに比重を置きがちであった。が、主題考察は、一つの手法に過ぎず、それが目的化されるべきではない。どのような教材でも、主題考察には直結しない生徒の「読み」の目の付け所というものは数多くあり、それが実は該当場面の「読み」を深める大変有効な手立てとなることもある。本作に話を戻すと、作者が与えた物語展開（ストーリー）や舞台設定（プロット）、数々の言葉や比喩表現、舞台となる羅生門の空間性など、読みの観点が多い故に、教員側から一つの主題モデルを示しがちになる。が、その実証のために根拠をなぞって「読んだ」気にさせただけでは、「生徒」がその生産に関与しない点で共同の「読み」は成立しない。より細かい個々の表現の解釈可能性や、作品の構造的特徴、語り手の指向性等、読むべき観点（モチーフ）を幾つか絞る。どの要素が「何」を「読む」ことになるのか、その可能

性を探り当てる過程を共同検証するだけでも、十分生徒の「読み」を引き出すことに結びつくだろう。

■読者としての「生徒」の視点

生徒の視点が契機となったケースを紹介する。

例えば本文前半部に、高く聳える門の鴟尾の周囲に鴉の群れが胡麻のように見える場面がある。ここを指導書等では、門の丹の色・夕焼け空と、空高く舞う黒い鴉の群れとの、色彩や遠近の対照などに注目させることが多い。生徒の一人は、ここでの物語を語る目線が、下人ではない方を見ていることを指摘した。これは教師や研究者の目線で見れば目新しいことではないだろう。しかし本作を初めて読む「生徒」であれば、語り手の視座の動きを初めて自覚した意見だと分かる。語り手は、冒頭部分で羅生門下で雨やみを待つ唯一人の下人を外側から焦点化して描出するが、今度は当時の地震や火事で荒廃した羅生門の姿を解説する説話の語り手のような姿勢をとり、更に転じて下人の目線に同調して、その目から門と楼上の空を見上げる視点に読者を誘導してゆく。こうした視座を代えて憑依してゆく語り手の位置への認識を生徒と共有することで、読者が読みうる多様な「門」の意味の可能性を生徒と探求できる筈だ。

前掲の例で言えば、卑小な下人の目で語られるからこそ、門の鴟尾を行き交う鴉は、遙か頭上高く胡麻粒のように小さく見え、それは門の楼が、はかりしれぬ巨大なものとして不気味に屹立する、その立体感（奥行き）を文章中から体感させることにもなる。この語り手の性質に目を向けるなら、他にも前半部で梯子から楼上を窺う下人を「男」と呼び変えている理由や、末尾で黒洞々たる闇に消え去る下人を老婆目線で見送らせていることの効果など、物語全般に渡って様々なアプローチが可能であろう。

次に、下人と老婆とが邂逅する場面。楼上で屍骸の髪を抜く老婆を初めて認識した際、下人は老婆を「悪」であると決めつける。が、下人が老婆に反感を抱く理由は、本文に「この雨の夜、この羅生門の上で、屍骸の髪の毛を抜くと云ふ事」が「許すべからざる悪」と感じたとあるだけだ。だがこれは、大変感覚的で論理的に不明確な定義づけである。加えて当時の社会情勢を考えれば、困窮した民が屍骸の髪を抜くのは、さほど奇異なことではない。まして それが善か悪かを決める絶対的基準にはならない。あくまで近代の人間性に照らした場合、良識に反する行為らしい、という程度のものだ。生徒からも「老婆は異様なだけで悪とまでは言えない」、「盗人になることを考える下人より老婆の方が悪とは思えない」、「死の雰囲気を悪と取り違えていると思う」等の意見も出た。生死・善悪・秩序と混沌など、テキスト内に明示される様々な対立の要素が顕著なのは今更言うまでもない。が、ここで「境界としての門」「媒介としての梯子」の役割などに皆で目を向ければ、こうした相対的な要素が決して単純な対立としては描かれていないことにも気づくだろう。

こうした観点には、物事の両義性が常に内包される（我々の生きる）現代社会の時代規範が、図らずも示されていると言える。この規範を読みに還元するなら、後半の老婆の「やむを得ず行う悪は許される」との論理と、下人によるその「生の論理」の簒奪とが相俟って、「悪であること」の意味づけ自体が、今度は「生」の意味と交換可能な相対的な位置づけを獲得して、結果的に悪（善）や死（生）の絶対的な基準の有無自体を、読む者に疑問視させるような、新しい読みの地平を望ませてくれるだろう。

■読み手自身を「読む」

拙い論の中で、本作の「読み」の再生のヒントを探ってみた。本作を扱うたび、読みの規範を背負う私自身の解釈基準の変容を痛感させられる。換言すれば、「羅生門」というテキストをフィルターにして、現代の読者である「私達自身のあり方」を読み続けているとも言える。これは同時に、自身をそこに「読む」読者が存在する限り、向後百年たとうとも「羅生門」の「読み」が再生産されるのを予兆させるものだ。常に新しい読み手を生む物語なのだ、と考えたい。

①土方洋一著『物語のレッスン　読むための準備体操』（青簡社、平16・2）
②吉田精一著『芥川龍之介』（三省堂、昭17・12）
③三好行雄著『芥川龍之介論』（筑摩書房、昭51・9）
④関口安義著『芥川龍之介 実像と虚像』（洋々社、昭63・11）
⑤平岡敏夫著『芥川龍之介と現代』（大修館書店、平7・7）
⑥三谷邦明著「『羅生門』の言説分析」（『近代小説の〈語り〉と〈言説〉』所収、有精堂、平8・6）
⑦長野甞一著『古典と近代作家 芥川龍之介』（有朋堂、昭42・4）
⑧田近洵一著「『羅生門』研究・その教材価値論への視点」（田中実・須貝千里編著『〈新しい作品論へ〉〈新しい教材論へ〉』所収、右文書院、平11・2）
⑨浅野洋著「今、アクタガワとどう向き合うか―『作者』のゆくえ―」（浅野洋・芹沢光興・三嶋謙編『芥川龍之介を学ぶ人のために』所収、世界思想社、平12・3）

特集◉ 羅生門一世紀

「羅生門」の扉を開くために——授業を拡張する七つの鍵

慶應義塾志木高等学校教諭 小澤純（おざわじゅん）

現在、「羅生門」は高校一年の一学期に扱うことが多い作品です。生徒たちが日本の近代文学へと入門するための、大事な役割を担っています。私自身、教育実習に始まり何度も「羅生門」を教材にしてきました。その虚構世界や文学史的な広がりを生徒達がより確かに感じ取るために役立つ七つの「鍵」をご紹介しましょう。［本文は教科書より］

第一の鍵

「羅生門」の冒頭をめぐって

なぜ冒頭の一語が「ある日」なのか。芥川に夕暮れから始まる物語は多いのですが、しかし印象深い「あの日」の光景ではなく、あくまで「ある日」という、任意の点を座標軸に置く手付きです。「蜘蛛の糸」の冒頭も「ある日」ですし、「或日の大石内蔵助」ではタイトルにまで忍び込んでおり、武者小路実篤「或日の一休和尚」との関わり［浅野洋］も含め、芥川文学の一特性と言えます。また、「ある日の暮れ方のことである。」と同じ音が響き合う仕掛けや、過去形「あった」ではなく現在形であることも気になります。「羅生門」の〈作者〉にとっては、自在に書きつつある現在の方が、書かれていく物語の単線的時間よりも上位にあることを示唆します。そこでは、無数の「ある日」に無数の〈下人〉が様々な状況に投げ込まれる可能性が担保されています。

書斎の「旧記」などを典拠にして、匿名の〈作者〉のペン先から生まれる任意の「ある」世界が、どこまでも増殖するシステム。それはオリジナル／コピーが混在・並行しながら活性化する、いわゆる可能世界論的な虚構モデルです。生徒たちにとって、マンガやネット空間で繰り返される二次創作に似た感覚が宿っています。

第二の鍵

ペンネームと北原白秋の影

「羅生門」が初めて掲載されたときのペンネームは〈柳川隆之介〉。福岡県柳川出身の北原白秋（本名・隆吉）に因んだと言われていますが、江戸っ子として泥鰌の柳川鍋、また少年時代に熱狂した海洋冒険譚『海底軍艦』の登場人物に由来する説もあり、そうした多義性こそが芥川の文学とも通底します。

この頃、短歌雑誌『心の花』などに白秋調の歌を発表しています。吉田弥生への恋情に裏打ちされた「いつとなくいとけなき日のかなしみをわれにおしへし桐の花はも」などは、まさに〈Sentimentalisme〉の極みであり、また若山牧水の本歌取りである「幾山河さすらふよりもかなしきは都大路をひとり行くこと」からは、都会的な感傷を古典素材に落とし込む片鱗が窺われます。

やがて斎藤茂吉の力強い歌に強く惹かれていく芥川ですが、第一短篇集『羅生門』が白秋と弟・鉄雄が経営する阿蘭陀書房から出るなど、北原白秋との関わりの持続は興味深いところです。

第三の鍵

『帝国文学』の中の夏目漱石

夏目漱石との木曜会を通した師弟関係は「羅生門」発表以後ですが、掲載誌『帝国文学』に着目すると意外な繋がりが見えてきます。『帝国文学』は、明治二八年に創刊された帝大文科関係者による学芸雑誌であり、「坊っちゃん」では教頭の〈赤シャツ〉が自慢げに持ち歩いています。英国留学から帰った漱石は明治三八年に「倫敦塔」を掲載します。〈余〉は血腥（なまぐさ）い英王朝の歴史を塗り込んだ塔の中で衒学的で幻想的なイメージを膨らませていきます。「羅生門」と比較すれば、羅生門に伝説通り鬼が潜むがごとき恐怖と好奇心を昂進させていく〈下人〉、書斎で東西の知識を駆使する〈作者〉には、それぞれ〈余〉と共通点があります。帝大を退いた漱石の講義を受けられないことを悔しがった新入生の頃の芥川とも繋がります。二人は、ある意味で『帝国文学』の誌面にふさわしい作品を執筆していたのです。

第四の鍵

「ひょっとこ」という分岐点

大正四年十一月の「羅生門」より先に『帝国文学』に掲載された芥川作品は、同年四月の「ひょっとこ」です。これは、吾妻橋の欄干から花見の船客を哂う人山の活写から始まります。明治末期から隅田川界隈をセーヌ河に見立てた江戸趣味が花開きましたが、この作品は永井荷風の文明批評や谷崎潤一郎「幇間」の倒錯とも、白秋や木下杢太郎の詩的情調ともどこか違います。酒に酔っているか、しらふでは他愛のない嘘をついているかの〈平吉〉が、ひょっとこの面を借りて船上で馬鹿踊りを始め、近代を象徴するような川蒸気の波で転倒し頓死します。

芥川は〈平吉〉に仮託して、近代日本から取り残された下町・本所で育んだ繊細な感受性との決別を演出します。そして野性味溢れる『今昔物語集』を主材源とした〈王朝物〉への劇的な跳躍を印象付けます。この大きな段差に注目すべきです。

第五の鍵

『諸国物語』と『今昔物語集』

森鷗外の翻訳集『諸国物語』が芥川に与えた影響は大きく、「羅生門」に限ってもシュトローブル「刺絡」から「黒洞々」の語句を、ブウテェ「橋の下」からは食いはぐれた男と老人との盗品をめぐる問答をと、枚挙に遑がありません。しかし何より、世界文学を縦横無尽に収めた書物が発する存在感こそ、芥川文学の基底を刺戟したのかもしれません。同時代の証言者として、石川淳は「悪魔が乗り移るには恰好の侏儒」によった「他に比類のない無精神の大事業」だったと回顧しています（『森鷗外』）。

鷗外によって貫徹された翻訳文体の多様な使い分けは、〈侏儒〉を自称し多彩な素材に挑み続けた芥川の創作理念に重なります。説話の蒐集者・大納言隆国が登場する額縁小説「龍」（作者名と照応）も傍証になりますが、雑駁な出来事の集積である『今昔物語集』への並々ならぬ関心とも繋がりそうです。

第六の鍵

大逆事件・ニーチェ・「沈黙の塔」

大逆事件という国家テロルに対し徳冨蘆花が一高（芥川在学中）で「謀叛論」を講演したこと、また芥川のニーチェ受容を起点にして、「羅生門」における精神的革命が論じられることがあります。ただ、こうした抑圧からの自己解放［関口安義］という視点とともに、大正期にまで持ち越された抑圧の来歴を探ることも大切です。

明治四四年に刊行された生田長江訳『ツアラトゥストラ』には鷗外「沈黙の塔」が序文として再録されます。事件のフィクサー山縣有朋に近い位置にいた鷗外による、風刺と諦念が入り混じった寓話です。この作品は、冒頭で二、三羽の烏が夕暮れに塔の周辺を舞い飛び死体をついばもうとする情景や、「羅生門」に影響を与えたドストエフスキー『罪と罰』を検閲対象に挙げる点など、大逆事件以後の閉塞感を「羅生門」に架橋します。その空気は、「尾形了斎覚え書」のような〈切支丹物〉にも流れているかもしれません。

第七の鍵

大正七年の「羅生門」の行方

授業をしていて、「羅生門」の最後の一文の扱いに悩みませんか。「下人の行方は、誰も知らない。」へと変更されたのは、初出から三年経った大正七年七月刊行の『鼻』収録の際です。この改変の意図について、先行研究に興味深い説はたくさんありますが、ここでは試みに、〈批評する語り手〉［田中実］が顔を出す「羅生門」を、同時代への寓話として読んでみます。〈下人〉の〈老婆〉への行為は、いくらその論理を精査しても弱者への暴力であることは確かです。

初出時にはすでに第一次世界大戦が始まっており、状況に左右されやすい〈下人〉の心理や言動の「行方」は、帝国主義的な主体のアレゴリーとして読み替えられそうです。『鼻』刊行は日本がアメリカからシベリア出兵を打診された頃ですが、終結後の日本の振る舞いは「京都の町へ強盗」レベルを超えていったのでは…。敗戦後に撮られた黒澤明「羅生門」のラストは象徴的です。

特集◉羅生門一世紀　授業実践と指導案

生徒の疑問から始まる「羅生門」

三宅義藏（みやけよしぞう）
千葉県立千葉高等学校教諭

■初めに

「羅生門」は、やはりすばらしい教材である。

私は今年教員生活四十年目を迎え、「羅生門」の授業も十九回目となったが、指導の仕方を工夫することによって、「羅生門」は毎回新たな魅力を見せてくれる。

今年度は、まず羅生門初読時の疑問点を生徒に挙げさせ、その疑問点について班で検討し、発表する、という形を取った。その様子をここに報告したい。

■発表の形態

私はほぼ毎回、「羅生門」の授業の最初に「羅生門」を黙読させ、疑問に思ったことを提出させる。疑問点は、言葉や文の意味、状況、心理の内容、心理変化の理由、作者の意図など多岐にわたり、似た内容のものは強引に私が一つにまとめてしまうのだが、それでも疑問点の数は二百項目を超えることが多い。今年度は、四クラス一六〇人で、二五八項目となった。

出された疑問点は私が一覧表にまとめ、その疑問点を出した人数も記しておく。授業では、「そういう疑問を抱いた友達がいるのだから、しっかり考えてわかりやすく答えようよ」という態度で疑問点に取り組み、読み進めていくことになる。

今年度は、その検討を班別に行い、発表するという形を取ったのである。

紙幅の関係で細かな方法等は省略するが、ここでは次のことだけを示しておく。

・班員は四～六人。一クラス九班。

・疑問点のどの箇所をどの班が担当するかは教員が指示する。（今回は二五八項目のうち一二七項目を対象とし、一つの班が十数項目を担当することとした）

・一つの班の発表時間は四十分くらいとする。残り十分は教員の指導時間とする。

・各班は、発表の前日までに、発表内容と発表方法（各項目ごとに、プリント、模造紙、板書など）等を所定の用紙に書いて提出する。

■発表の実際

生徒たちは、私の予想をはるかに超えて積極的に検討・準備し、発表内容も実に見事なものであった。その様子を詳細にお示しできないのが実に残念である。紙幅の関係で、ここでは次の一つの例に絞って紹介したい。

> 疑問点＝ここまで、不気味な色が多かったが、ここで「紺」を出した効果。2人

これは、下人の着物の色が紺である理由や、そのように設定した効果を問うているのだが、初読の疑問点としてはレベルが高く、どう取り組んだらよいかわからずとまどった班もあった（四クラス＝四つの班のうち、二つの班）。そのような班に対しては、「他に着物の色が出てきたら、それと比較して考えたらどうだろう」と助言しておいた。

その助言をした班もしなかった班も、その発表内容はおおむね以下の通りであった。

> ここまでで印象に残った色＝赤と黒
> ・（蟋蟀をコオロギだとすれば）
> 丹塗りの赤をバックに、蟋蟀の黒
> ・夕焼けの赤をバックに、鴉の黒

> 赤と黒の組み合わせは不気味。
> 赤と黒は地獄のイメージである。
> （血の赤、死や闇の黒）
> 羅生門は、赤と黒の世界、地獄の世界。

> 後で出てくる老婆の着物は「檜皮色」。
> 檜皮色は「赤」と「黒」のまざった色。
> 老婆は、赤と黒の世界である羅生門の象徴として登場する。

> それに対して、「紺」は普通の色。
> 下人は「普通の人」として登場する。

下人が「紺」の着物を着ているのは、悪に染まっていない、普通のモラルを持った普通の人ということを示しているのではないか。

（次のことに触れたのは、四班のうち二班）

最後の方に「下人は、剝ぎ取った檜皮色の着物を脇に抱えて、またたく間に急なはしごを夜の底へかけ下りた」（傍点引用者）とあるが、これは下人が老婆から「羅生門の世界（地獄の世界）」を受け継いだことを示しているのではないか。

四つの班の発表内容はおおむね以上のようなものであった。

やや図式的過ぎる解釈かもしれないが、高校一年生になったばかりの生徒であり、「羅生門」を読み始めたばかりの時点の読みとしては、かなりの内容であると評価してよいだろう。

このような読みは、おそらく一人ではなしえなかったと思われる。発表準備の様子を見て強く感じたのだが、生徒たちは、驚くほどしっかり「羅生門」を読み込んできていて、班での討論の場では勢いよくページをめくり、激しく意見をぶつけあっていた。そこには、班のために役立ちたいという思い、自分の読みの深さを自慢したい思い、友人と意見を交わす喜び、すぐれた友人への敬意と、その友人と触れ合える喜びなどが渦巻いているように思われ、それはちょっと胸が熱くなる景色であった。

■終わりに

以上、今回行った授業の一端を紹介させていただいた。

この授業を通じて特に強く感じたことの一つは、班別・発表授業のすばらしさである。もう一つは「羅生門」の教材としてのすばらしさである。生徒の読みに「羅生門」はしっかり応え、生徒の意欲をさらに高めてくれた。

今回は班別の発表授業を行ったが、「羅生門」の授業には他にもさまざまな取り組み方がある。「羅生門」は、その取り組み方に応じて、その都度、新たな魅力を示してくれる、すばらしい教材だと、今、あらためて強く思うのである。

国語科なんでもQ&A

Q アクティブ・ラーニングとは？

最近は「アクティブ・ラーニング」という言葉がよく聞かれるようになりました。大学入試の改革とも関連があるようですので、勉強しなければならない、と思ってはいるのですが、今ひとつ実態がわかりません。「アクティブ・ラーニング」では何をするのですか？

高知県・42才男性

A

初谷（はつがい） 和行（かずゆき）　貞静学園短期大学講師

「アクティブ・ラーニング（以下「ＡＬ」）」とは「学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称」のことです。具体的には、話し合いやグループ・ワーク等を通じて行う、問題発見・解決学習、調査学習等を指します。ですから、先生方がこれまで実践されてきた授業の中にもＡＬはあります。また、従来の講義的な授業が否定されているわけでもありません。学習で得た知識や技能、基礎・基本的な力をベースに能動的な学習活動を展開することで、学習内容を定着させたり活用力・汎用的能力を養おうとするのがＡＬの目的です。このことをふまえ、知識や技能、基礎・基本的な力を養う授業と組み合わせながらＡＬを実践する必要があるでしょう。

最近では「ジグソー法」（54ページ参照）などが授業実践として取り上げられることが多くなりましたが、他にもグループ活動の技法はあります。規模の異なる話し合いの活動を二つほど紹介したいと思います。

1．ワールド・カフェ

（一回の話し合いは二五分前後）

①四名程度のグループを作り、テーマについて話し合う。

②一人（ホスト）を残して、他の人は別のグループにバラバラに移動する。

③ホストの人が先ほどの話し合いについて報告しつつ、話し合いを続ける。

④①のグループに戻り、再びテーマに関する話し合いを深める。

2．シンク・ペア・シェア

（一回の話し合いは五分前後）

①テーマについて各自で考える。

②四名グループを作り、二名×二グループに分かれ、それぞれ話し合う。

③四名になり、②の内容を共有しつつ話し合いをする。（省略可能）

④クラス全体で発表し合う。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。ご質問は小社「国語教室Q&A係」まで。

特集◉羅生門二世紀　授業実践と指導案

心情の動性と場の象徴性
――「羅生門」への二つのアプローチ

津久井秀一
栃木県立国分寺特別支援学校教頭

芥川龍之介の「羅生門」が高等学校一年の前半部で取り上げる小説教材として不動とも言える位置を占めているその理由とは何だろう？　自明なことだが、小説には読解するための観点がある。人物に関する内外面の描写、象徴性を帯びた状況背景に関する描写、伏線、視点、物語世界のトーン等、今、観点ごとの詳細を論じる暇はないが、これらのいずれに着目しても「羅生門」には読み取るべき明瞭な要素を見出すことができる。この小説鑑賞上の多様な観点を提示できるという利点が、「羅生門」が安定教材であり続ける要因の一つだと考える。既に多くの授業案や個々の設問も示され尽くしている状況だろうが、こうした事情を念頭に置きつつ、今、あえて以下に示す二つの設問を提示してみたい。

設問一　「下人の心情描写の変化を全体的に捉えた場合どのような特徴があるか考えてみよう。」

「老婆」の言動に伴って刻々と変化する「下人」の心情は、「羅生門」の中心的な読みどころの一つだが、語られた心情描写は、そこに含まれる〈意味〉を見出すことがなかなか困難なものがほとんどだ。《下人は、六分の恐怖心と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさえ忘れていた。》

語句の説明を除けば、これ以上の説明は不要だし、また、不可能でもある。つまり描写は既に「下人」の心情の客観的かつ徹底した〈説明〉なのであって、解釈を可能にする表現の〈身体性〉を有してはいない。「羅生門」において、心情を読むことが心情の流れを整理することと限りなく重なって来るように感じられる所以である。こうした事情を踏まえた上で、筆者が生徒に読ませたいと思う事柄は、「下人」の〈変化〉する心情の動性そのものである。それは楼に上る前にはいずれとも決めかねていた「饑死する」ことと「盗人になる」ことととの間を瞬時に移り変わる極端な転移の様相として把握できるのだが、その動きの極端さは、「下人」の「面皰」が象徴する「若さ」や、更には作品末尾の「行方は誰も知らない。」という将来の不確定性とも響き合っている。心情は〈変化〉に着目する時、単なる整理された情報ではなく、表現の集積によって初めて浮かび上がる〈意味〉として、新鮮さを伴って生徒に見出されるのではないかと思えるのだ。

設問二　「羅生門」という空間は天国と地獄のどちらだろうか。本文の描写と次に示す古文を具体的な根拠として考えを述べなさい。」

一緒に読ませる「古文」としては、『方丈記』「養和の飢饉」の《あやしきことは～かれに譲るによりてなり。》までの部分と『今昔物語』「羅城門の上層に登りて死人を見たる盗人の語」を考える。

「羅生門」が平安京の繁栄を象徴する場であり、それ故描写される状況が反転して都の「衰微」を示すといった事情は周知のことだろう。また、研究サイドからの「門」の周縁性、媒介性等の指摘を踏まえた上で、更に一歩進めた場の象徴的意味を考えさせてみたい。屍の転がる「羅生門」楼上は、疑いようもなく「地獄」的ではないかと判断されるのも道理ながら、例えば死体を運んできた人達が苦労して楼上まで運び上げた真意や、「方丈記」の「その思ひまさりて深きもの、必ず先立ちて死ぬ。」といった時代の状況、更に、楼の上という「高さ」の有する意味、「下人」が行為を獲得した経緯等を踏まえつつ考え直すなら、逆の「天国」説も強ち無理な解釈ではないのではないかと考えたことが設問とした理由である。〈「下人」のその後〉に関する考え同様、表現を具体的根拠として意見を出し合う授業は、読みの多様性を互いに確認し合うよいきっかけとなると考える。

＊本稿は、「小説安定教材におけるクリティカル・ポイント――芥川龍之介『羅生門』――」『国語教育と研究第50号（二〇一二）』栃木県高等学校教育研究会国語部会発行の内容を元にしている。

特集◉羅生門一世紀　授業実践と指導案

「羅生門」の世界を写真で表現する授業

寺坂俊範
麗澤中学高等学校教諭

■生徒の状況と授業のねらい

小説を読む際、個々の人物にのみ注目するあまり、その人物と周囲の関係にまで視野を広げられない生徒が多いように思う。必ずその人物には置かれている時代があり、背景があり、多くの場合には相手がいる。しかし、そういった場面設定と、描かれている人物を繋ぐことができないのである。

人物の心情理解には、場面全体を捉える広い視野を持って、相手の反応や周囲の変化にも注目することが必要である。そのような読み方ができれば、自然と場面展開も意識でき、全体を通じた「物語」の主張を読み取ることができるようになると考える。

以上の点を意識し、読解のための広い視野が身につくように、写真を用いて場面を捉える授業を「羅生門」で実施した。

■授業の概要

【対象】麗澤高等学校一年 高入特進クラス
（男子19人、女子15人）

【日時】二〇一四年六月・七月

【各時の概要】（全7時間扱い）

第1時　芥川龍之介の解説、全文音読、場面分け
第2時　対比表現を捉える
　　班ごとに写真にする場面を決める
第3時　キャンパス内で写真撮影
第4時　写真提示と場面の説明（パワーポイント）
第5・6時　第二場面以降の読解
第7時　『今昔物語集』との比較、DVD鑑賞（『名作ってこんなに面白い2』ゆまに書房）
（定期末考査にて確かな読解力を練磨）

■場面分けと読解（第1・2時）

まず、場面とその展開を意識して読むために、場面分けと場面ごとのポイントをまとめた。

次に、ワークシートを用いて、物語中の人物や事物を「対比」と「象徴」に着目しながらまとめた。例えば「対比」では、「下人」と「老婆」を比較し、「若さ」と「老い」という対照を考えたり、あるいは、「善」と「悪」として捉えたりした。また、「象徴」では、「羅生門」上の「鴉（からす）」から「不吉さ」を連想したり、「門」が何を表しているかを考察したりするなど、活発な意見が飛び交った。

この活動によって、周囲との関係の中で描かれる人物像に注目しながら、読解を深めることができた。

■写真を用いて場面を再現する（第3時）

ここまでで、人物のみならず、その背景とそこに描かれたものに一つずつ注目して読む姿勢ができた。しかし、それらはまだ物語上の独立した「点」である。次の段階として、その「点」を繋ぎ、「線」、そして「面」へと拡げていくために、生徒たちが自分たちで場面を再現し、表現する活動を取り入れた。

まず、六～七人の班（五班）を作り、それぞれの班ごとに相談しながら、「羅生門」の冒頭から羅生門の楼へ上りきるところまでの場面を、八つ程度のコマに分けた。そして、それぞれのコマを自分たちの身体を使って表現し、写真に撮った。そのようにして作った写真作品を、物語の流れに合わせて発表した。写真を見せながらその内容を説明する、いわば、紙芝居のような発表である。

撮影当日は小雨が降る、恰好の「羅生門」日和となった。生徒たちの気持ちも物語の世界に入っていく。生徒たちは演出家として、本文の描写に注目しながら一コマ一コマを作り上げていった。

各班に一台ずつ配ったデジタルカメラと、読解のキーワードになっている、「蟋蟀（きりぎりす）」のイラストと

図1　雨やみを待つ下人

図2　道端に積み重ねられた仏像

図3 羅生門に捨てられた死人

図4 死人の肉をついばみに来るカラス

図5 大きなにきびを気にする下人

図6 主人に暇を出される

「面皰（にきび）」を表す赤い丸ラベルシールを手にし、生徒たちは撮影ポイントを求めて班ごとにキャンパス内に散っていった。衣装や大道具など一切ない中、想像力と表現力で補いながら、場面の様子を自分たちの身体で表現し、写真を撮っていった。撮影終了後、各班の作品が収められたデジタルカメラを回収し、それを授業者がパワーポイントにまとめた。

■写真を用いた発表（第4時）

次の授業では、物語の展開に沿って教室のスクリーンに映した写真作品を、班ごとに紹介した。生徒たちは、どの場面を取り上げたのか、何を表現したのかを、写真ごとに説明していく。伝わりにくい部分は、聞き手側の生徒（時には授業者）が質問をし、詳細な説明を求めた。

文章を画（え）にすると、情報量が少なく、どうしても想像に頼らねばならないところが出てくる。しかも、その想像が物語から乖離したものにならないように、細部まで読み込む必要が出てくる。その場面の時間帯や空の色。その場にいる人の数や、人々の目線、表情…。生徒の作品には、そういう細部に至るこだわりがうかがえた。

図7 下人が大きなくさめをする

図8 はしごを上る下人（その1）

図9 はしごを上る下人（その2）

図10 楼の内を覗く下人

例えば、洛中のさびれた様子を表すために、死人や鴉、さらには雨ざらしにされた仏像を演じた班もあった。あるいは、キャンパス内の垣根や階段の手すりを、楼上につながる梯子（はしご）に見立てる（図8・9）など、班ごとに創意工夫が見られた。

■その後の展開とまとめ（第5～7時）

発表以降は、場面全体を画にできているかを確認しつつ、読解を深めていった。最終時に「羅生門」のDVDを視聴した際には、表現者の視点も持ち、カメラワークなどに関心を示す生徒もいた。読解を深めるための授業ではあったが、結果としては、演じることや撮影すること自体を楽しみながら、表現力も身につけたようである。

自分たちで構図を考え写真を撮り表現した、この「羅生門」の授業は、非常に印象に残ったようである。授業後一年経った先日、改めて生徒たちにアンケートをとったところ、授業の細部に渡って記憶している生徒が多かった。

今後も限られた授業数の中で、生徒の興味を引き出しつつ、生徒が自ら学ぶ中で、読解力・思考力・表現力をつけられる授業実践を継続していきたい。

特集◉羅生門一世紀　授業実践と指導案

境界としての「羅生門」が語るもの
――古典との読み比べで芥川のオリジナリティーに迫る

長野県松本蟻ヶ崎高等学校教諭　細川恒（ほそかわひさし）

■生徒は「羅生門」を読めているのか？

芥川龍之介の「羅生門」が不動の定番教材となった理由の一つに、小説冒頭の舞台設定（5W1H）の巧みさが挙げられる。「国語総合」の導入期に小説の構成要素について考えさせるのに適した教材と言えるからであろう。しかしその一方で、芥川の簡潔で計算された文体ゆえに、その後の学習は下人の心理の変化を追うことに偏りがちになり、冒頭部分が果たす役割について考察することは少ない。

そこで、今回は小説の舞台となる羅城門という建築物の規模や平安京における意味、また主人公である下人の社会的階層や境遇等について調べた上で、小説「羅生門」の出典の一つとされる『今昔物語集』「羅城門の上層に登りて死人を見る盗人の語」の本文と読み比べる学習を通して、芥川「羅生門」のオリジナリティーについて探究する単元を構想した。

■授業の概略

授業計画（全8時間扱い）

1　冒頭部分（「ある日の暮れ方の～一番下の段へ踏みかけた。」）から読解上重要と思われるキーワードを選び、グループごとに一つを担当して調べ学習を行い、発表し合う。〈2時間〉

【例】羅城門　下人　平安京　朱雀大路　丹塗り　災い（辻風・火事・飢饉）など

2　「羅生門」の読解＝通常のパターンで〈4時間〉

3　『今昔物語集』本文との読み比べを行い、両者の違いと「羅生門」本文の特徴について個々でまとめた上で、グループやクラス全体で交流し、芥川龍之介作品のオリジナリティーについてまとめる。〈2時間〉

評価規準

1　平安時代を理解するためのキーワードについて調べることで、小説の時代背景や舞台設定をリアリティを持って理解し、身近な感覚で想像し直すことができたか。

2　二つの文章を読み比べることで、内容や表現の違いに気づき、それぞれの特徴を指摘できたか。

3　前記の1・2を踏まえて、芥川龍之介「羅生門」における門が持つ象徴性や作品のオリジナリティーを論理的に考察、批評することができたか。

■授業の実際

ここでは授業計画1の学習活動を中心に報告する。次に挙げたのは生徒が調べたキーワードの内容と具体的な説明の例である。

○羅生（城）門　規模は幅約三五m、奥行き九m、高さは約二一m。中央五間に五枚の扉が入り、木の部分は朱塗りで、五段の石段が二四mの幅で門につながっていた。門は内裏へ続くメインストリート朱雀大路の南端にあり、平安京の正門として外交使節や地方から上京する人々を迎えた。平安京を象徴する壮大な楼門で、西の京と東の京の境界でもあり、門の両側からは羅城（＝城壁）が張り巡らされていた。多くの説話に鬼が棲む異界として登場している。

〔生徒による実感に近い説明〕

門の高さが二一mとあるが、校舎で言えば四～五階の高さになる。また、朱塗りの門は国家が管理した建築物であることを示し、朝廷の権威を物語るモニュメントでもあったのだろう。小説だけを読むと小さな門のようにも思えたが、教科書写真の羅城門復元模型や平城京跡に復元された朱雀門（＝羅城門と同じ規模）を映像で見るとその壮大さが想像できる。

○下人　「中世において、他者による人身的な支配、所有の対象とされた隷属民。」「平安後期に登場する下人は『下衆』と同じ存在であり、有力農民である富豪層や田堵などの農民層から、主人に従属する従者をも包括する幅広い身分呼称として使われた。」

（『日本歴史大事典』　小学館）

〔生徒による実感に近い説明〕

「羅生門」に登場する下人は「永年、使われていた主人」から「暇を出され」ている。つまり、彼は何代かにわたって特定の主人に仕えた隷属民であった可能性が高い。とすると下人が「暇を出された」ことは彼自身にとって単なる失職程度の出来事ではなく、今までの自己の生活基盤、価値観等を全て失

う衝撃的なアクシデントであったことが分かる。飢饉などのために都市に流入した下人（＝「羅生門」本文だけからこのように断定するのは難しいが）は小説の終わりで自分のことを「引剥」をしないと「飢え死にをする体なのだ。」と老婆に向かって「かみつくように」言うが、羅生門にたどり着いた段階では、そういった現状認識がまだできておらず、あいまいな状態であったと考えられる。

○平安京と飢饉　平安京は東西約四・五km、南北五・一kmの長方形で、大内裏をはじめとする政治の中枢が集中し、高級貴族が居住する都市であったが、一方では劣悪な生活環境の下で生きる下層民も多く生活していた。鴨長明『方丈記』中の養和の飢饉（一一八一年）の記述には左京だけで「四万二千三百余り」の死者が出たと記されている。平安京の人口は不明であるが、平城京（＝一〇万人程度）を越える人口であったことが想像される。高い人口密度の中で疫病なども流行したであろう。藤原経房の日記『吉記』には「五条河原の辺りにて、三十歳ばかりの童、死人を食（ら）ふ」という噂も記されている。

〔生徒による実感に近い説明〕

本校の近くにある松本城を中心に平安京の規模を地図上に書いてみると旧市内とほぼ重なり、思ったよりも広くはないという印象を受ける。しかも西の京は湿地帯が多く居住地に適さなかったので、平安京が相当な過密都市であったことが分かる。

■まとめ

調べ学習を経て授業計画3の読み比べまでの学習を行った。ここでは『今昔物語集』本文と「羅生門」本文との顕著な相違点を挙げて、そこから見えてくる芥川のオリジナリティーについて指摘する。

『今昔』における羅城門は「盗みせむがために京に上りける男」が日中に身を隠す場所としてただけ描かれているが、「羅生門」では平安末期の平安京の政治、経済、文化の衰微や荒廃を象徴するモニュメントとして詳しく描き出される。また同時にこの門は自らの前途に対し「途方にくれていた」下人が、生を存続させなければならない現実を認識し、心理的葛藤を乗り越えて盗人へと変身を遂げていく転換点、つまり境界としての意味をも持っている。調べ学習で浮き彫りにされた下人の隷属民としての性格も「羅生門」の読みを特徴づける。今までは主人に所有され、その命令に忠実に従うことで生きて来られた下人が、自らの判断や価値観に従って生を選び取って生きる。そのドラマの舞台として羅生（城）門が選ばれているのである。これは『今昔』においては多くの怪異譚が語られる非日常的な場所として羅城門が設定されているのとは対照的である。羅城門と怪異との関係については志村有広『異界往来伝奇譚　羅城門の怪』に詳しい。

さらに、最終場面を比較すると、『今昔』では下人が「死人の着たる衣と嫗の着たる衣と、抜き取りてある髪」のすべてを奪い取って逃げ去るのに対して、芥川「羅生門」では「老婆の着物」だけを剥ぎ取って「夜の底」へ駆け下りる。これは下人が生を選択したことを宣言する行為として読むべきであり、盗人になることに重点が置かれてはいない。

また、『今昔』では天災やそれに伴う飢饉に関する記事が全く見当たらない。ところが、「羅生門」では地震や飢饉などの影響によって洛中が荒廃し尽くした様子が、死体置き場と化した羅生（城）門とともに語られる。これは後に下人が老婆と出会う場所となる楼上が持つ不気味さや緊張感を際立たせる演出としても重要な役割を果たしている。さらにそれは下人が駆け下りていった門の下に広がる「黒洞々たる夜」を理解する上でも示唆を与えてくれる。

■今後の課題

小説を読む上で時代背景や舞台設定に関する過度な知識は必要ではない。ただ昨今の教室で、「生徒は当然分かっているはずだ」と教師が考える基礎的な理解事項がかなりな程度で抜け落ちているという事実がある。教材と生徒の既有知識や体験との乖離が想像以上に広がっているのである。

今回の試みは定番化することで指導方法もマンネリ化しがちな「羅生門」の授業において、冒頭部分に描かれる「いつ・どこで・誰が」といった小説の構成要素について生徒が調べ、考えることで、その後の「羅生門」の読み方に広がりや深さが生まれること、また、出典となった古典の本文とを比較して読み、分析することで近代小説としての特徴を考察することが可能となることを示したものである。

中学校という共同体社会を出て、新たな価値観を見つけていかねばならない高校一年生にとって、「羅生門」という境界をいかに意識し、この「門」をいかに乗り越えていくかは下人にとってと同様に重要な課題として彼らに投げかけられている。

追跡リポート
入試改革

二つの新テスト

解説＝島田康行（筑波大学）
資料作成＝編集部

改革が進められる大学入試。本コーナーでは、文部科学省や「高大接続システム改革会議」の発表などをもとに、入試改革の最新情報をお届けします。今回は、二つの新テストの概要を取り上げます。

高大接続の改革に向けた議論が進んでいる。「高大接続システム改革会議」の「中間まとめ」など、重要な資料にはぜひ目を通しておきたい。文部科学省のウェブサイトから入手可能だ。

基礎学力の把握と提示を目的とする「高等学校基礎学力テスト（仮称）」は、希望参加による実施となりそうだ。学校単位での参加を基本としつつ、生徒個人の希望に応じた受検も可能となる。

測定される学力は「知識・技能」を中心としながら、「思考力・判断力・表現力」にも及ぶものとなる。「平均的な学力層や、学力面で課題のある層を主な対象」とした基礎学力の把握を目的としつつ、その結果の副次的な活用方策として、進学時等における生徒の基礎学力の提示、特に「学習意欲の低下が顕著な状態にある一部の推薦・AO入試の受検者層」の基礎学力の提示に用いることなどが想定されている。

「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」では、「知識・技能」に加え、大学入学段階で求められる「思考力・判断力・表現力」を評価することに力点が置かれ、それらを構成するより具体的な能力概念の整理が進められている。それらのうち、自ら問題を発見し、答えが一つに定まらない問題に解を見いだしていく、そのために必要な諸能力を重視して評価するという点は特に注目される。すでに教科ごとに設問の検討が進められており、具体的な問題イメージの公表が俟たれるところだ。

高等学校基礎学力テスト（仮称）

導入時期	・平成 31（2019）年度。 ・平成 35（2023）年度から新指導要領に対応。
ねらい	・高校生が身に付けるべき基礎学力の定着度を把握・提示できるようにする。 ・結果を指導改善に生かし、教育の質の向上を図る。 ・「知識・技能」を中心に評価。
実施回数・時期	・導入当初は、2・3 年次にそれぞれ 2 回、最大 4 回の受検を想定。 ・実施時期は夏から秋ごろを予定。
対象科目	・当面は必履修科目の「国語総合」「数学Ⅰ」「コミュニケーション英語」から出題。
出題内容・形式	・社会で自立する力を養うため、実社会の様々な事物に結び付けた問題や、条件を導き出す力、解答を導く過程などを重視する問題を出題予定。 ・選択式に加え、記述式の問題も導入予定。 ・導入当初は短文記述を一部試行実施する程度とし、次期指導要領下から一定の文字数を記述させる。 ・CBT（注 1）・IRT（注 2）形式も検討。
結果表示	・10 段階以上の多段階で提供。 ・絶対評価のテストであり、順位等は示さない。 ・結果は、入試・就職での利用も想定されているが、現行指導要領下は「試行実施期」とし、学習改善のみに用いられる予定。
その他	・テスト時間はおおむね 50 ～ 60 分。 ・受験料は 1 回あたり数千円程度。

大学入学希望者学力評価テスト（仮称）

導入時期	・平成 32（2020）年度導入。 ・平成 36（2024）年度から新指導要領に対応。
ねらい	・大学教育を受けるために必要な能力を把握する。 ・「思考力・表現力・判断力」を中心に評価。
実施回数・時期	・年複数回の実施を予定。 ・実施時期については未定。
対象科目	・現在、「国語」「数学」「理科」「地理歴史」「英語」の作業グループにおいて、作問の在り方を検討中。 ・現行指導要領下においては、試験科目数をできるだけ簡素化する。
出題内容・形式	・自ら問題を発見し、答えが一つに定まらない問題に解を見いだしていく能力を重視し、受検者が大学入学に向け、日頃から主体的・能動的に学ぶことを促すようなテストとする。 ・他の教科や社会との関わりを意識した問題の導入も検討。 ・選択式に加え、記述式の問題も導入予定。 ・当面は短文記述の導入とし、次期指導要領下からより文字数の多い記述式の問題を導入する。 ・CBT・IRT 形式も検討。ただし CBT の実施は次期指導要領下からとし、当面は CBT の試行に取り組む。
結果表示	・多段階による表示で提供。
その他	・英語については、民間の資格・検定試験の活用も検討。

新テストスケジュール

27年度	大学入試センター試験		
28年度			
29年度			
30年度			
31年度		★基礎学力テスト【現行指導要領】	
32年度	★学力評価テスト【現行指導要領】		【新指導要領対応】
33年度			
34年度 新指導要領開始予定			
35年度			
36年度			【新指導要領対応】

（注1）CBT　Computer-Based Testing の略称。コンピュータ上で実施する試験。
（注2）IRT　Item Response Theory（項目反応理論）の略称。この理論を用いることにより複数回受検する場合の難易度差による不公平を排除可能。導入のためには、事前に難易度推定のための予備調査や多量の問題のストックが必要。基本的に問題は非公開となる。
※資料は「高大接続システム改革会議」による「中間まとめ（九月五日）」（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/033/toushin/1362096.htm）をもとに編集部で作成した

新人教師のための漢文指導入門講座 中級編③

「WEB国語教室」連動

句法指導の心得
―四大句法① 使役

塚田勝郎（つかだかつろう）
筑波大学附属高等学校教諭

1　句法との適切な距離とは

筆者の高校時代には、二年生の文系クラスに古典文法の時間がありました。当時を振り返ってみると、退屈と我慢という言葉しか浮かんできません。古典文法のテキストを一年かけて一冊こなしたものの、筆者自身の意欲不足も手伝って、古文の力がついたという実感はありませんでした。

漢文の句法だけを扱う時間があったらどうでしょうか。時間数不足が悩みの種になっている昨今では、あまり現実的ではありませんが、筆者と同様に、つまらない時間と感じる生徒が多く出現するでしょう。

句法の重要性を否定するわけでは、まったくありません。むしろ「句法は大事」というスタンスを取りつつも、「漢文を攻略するためには、句法がすべて」とか、「まず句法を全部頭に入れる」という受験界の一部の「常識」に抵抗したいのです。

では、漢文の授業では、句法とどのように向き合えばよいのでしょうか。筆者の考えは、次の五点に集約できます。

1　句法は大事である。しかし、句法だけですべてが解決するわけではない。
2　句法を指導する際は、その句法が大事である理由を生徒に明確に説明する必要がある。
3　句法の中でとりわけ大事なのは、**疑問**と**反語**、**使役**と**受身**の四つ。この四つの形は、教材に出てくるたびに簡単に触れる。
4　句法は、必ず教材と関連させて扱う。句法集の短文の羅列を覚えさせても、効果は期待できない。
5　句法は「型」であることをしっかり認識させる。訓読では「型無し」や「型破り」は認められない。

2　句法指導の実際

前段に掲げた五項の補足説明も兼ねて、句法指導の実際的な場面を考えてみます。

漢文の読解には、様々な力が要求されます。漢字の意味、語順、文体、詩の形式、作者、時代背景など、多岐にわたる知識に加えて、前回取り上げた古典文法も、訓読には不可欠です。句法だけで解ける問題がないわけではありませんが、句法は読解のためのツールの一部に過ぎず、漢文読解は「総力戦」であることを強く意識させなければなりません。

また、句法指導は単調で無味乾燥なものになりがちです。そこで、数ある句法を最低限必要なものに絞り、生徒に安心感を与えることにします。筆者は最重要句法を、疑問と反語、使役と受身の四つに絞り込み、それぞれ組み合わせて指導しています。その理由を簡潔に整理してみましょう。

【疑問と反語】　特殊な例を除き、疑問と反語は見かけでは区別がつかない。区別は文脈からで、疑問は相手からの返答を期待するが、反語はそうではない。反語は、「…でない」「…である」という発言者の主張や意志を強く発信するためのレトリックであるから、解釈の上でも重要な部分になる。

【使役と受身】　この二者は、「型」を知らないと訓読できない。いずれも古文で学習した助動詞を当てて訓読する「型」である。使役の基本型「…をして…（せ）しむ」の「…をして」を、勝手に「…を」とか「…に」に変えてしまう生徒が多くいるが、「型破り」は困る。受身は、使役とちがって「型」が何種類もある点が生徒をとまどわせる原因になっている。

これ以外の句法、たとえば詠嘆や限定の形は、あえて時間をかけて指導する必要性は感じられません。「ああ」で始まったり、「かな」で結んだりすれば、詠嘆の形であることは一目瞭然です。「ただ…（のみ）」と来れば、限定の形と命名するまでもないでしょう。ただし、「ああ」という感嘆詞や、「ただ」と読む限定の助字にはどのようなものがあるかは、必ず漢和辞典の音訓索引などを使って調べさせておきたいものです。

指導する側が、句法との距離を適切に保つことが求められるのです。

3　使役の形の指導例

今回は、筆者が行っている使役の形の指導例をご紹介します。

使役の形　句法シリーズ#01

使役の形とは、「誰かに、何かをさせる」という意味を表す形。原則として、「使㆓A B㆒」の形で、「AをしてB（せ）しむ」と読む。

■ステップ1　使役の助字を四つ覚える。

・「使・令・教・遣」は、いずれも助字として「しム」と訓読する。文語文法では、「す・さす・しむ」を使役の助動詞とするが、漢文訓読では「しむ」だけを用いる。

・使役の助動詞「しむ」は、未然形に接続する。「（せ）しむ」と表記するのは、そのためである。

・「使・令・教・遣」の四字には、もともと意味の違いがあったようだ。しかし、解釈の上ではその違いを表す必要はない。

・「使・令・教・遣」の中で、よく用いられるのは「使」と「令」。「教」と「遣」、特に「教」は、あまり用例がない。

・高校三年生には言わずもがなのことだが、書き下し文では「使・令・教・遣」はひらがなに改める。

■ステップ2　基本形に習熟する。

使 涓 人 求 千 里 馬。→
使 人 抵 昭 王 幸 姫 求 解。→

問右の文で、「人」とは、誰のことか？

令 将 軍 与 臣 有 郤。→
遂 教 方 士 殷 勤 覓。→

■ステップ3　「遣」は、必ずしも「しム」と訓読しないことを知る。

故 遣 将 守 関 者、
→故らに将をして関を守らしめし者は、
→故らに将を遣はして関を守らしめし者は、

問右の文で、「遣」を「つかハス」と動詞に読んだ場合も、「しム」を添える必要があるのは、なぜか？

■ステップ4　「使㆓A B㆒」の「A」は省略されることがあることを確認する。

使 使 不 肖 王。→
令 遣 絹 二 匹。→

■ステップ5　使役の助字がなくても使役の形に読む理由を考える。

予 助 苗 長 矣。→予苗を助けて長ぜしむ。
以 為 四 隊、四 嚮。→以て四隊と為し、四に嚮はしむ。

※「使役を暗示する文字がある場合は、使役に読む。」という説明があるが、あまり現実的ではない。念のために「使役を暗示する」とされる文字の例をあげておく。

命　命じて…（せ）しむ　　勧　勧めて…（せ）しむ
説　説きて…（せ）しむ　　詔　詔して…（せ）しむ

■ステップ6　「使・令」が仮定の意味を表すことがある。しかし、この場合は送り仮名が付いていて、そこから判別できるはずだから、心配は無用である。

只使墜、亦不能有所中傷。
→只だ墜ちしむるも、亦た中傷する所有る能はず。
（もし落ちてきたとしても、人に当たってけがをさせることなどあり得ない。）

但令心似金鈿堅、
→但だ心をして金鈿の堅きに似しめば、
（二人の心が、金や螺鈿のように堅くしっかりしてさえいれば、）

筆者の勤務校では、古典文法のテキストと便覧（図説）は採用していますが、漢文専用の副教材は生徒に持たせていません。そのため、句法の指導には、自作のプリントを用いています。右に掲げたのは、高校三年生が使うものです。使役の形は教材に出てくるたびに取り上げて説明していますから、これは「使役の形の総まとめ」ともいえましょう。指導時間は、一時間を想定しています。

くり返しますが、このプリントは、三年生が一時間で使役の形の総まとめができるように工夫したものです。一・二年生で、使役の形が出てくるたびに簡単に触れていることを前提としていますので、このプリントだけで使役の形をマスターさせることには、無理があります。

授業は、プリントの項目に従って進めていきます。〔ステップ2〕以降の白文の部分は、筆者が読みを提示し、生徒が返り点と送り仮名を書き取ります。矢印の下が空欄になっている箇所は、生徒が各自で書き下し文を記入します。

〔ステップ3〕の発問はかなり高度ですから、段階を踏んで考えさせましょう。まず「『遣』と『守』の主語は何か。」と問いかけます。「遣」は沛公、「守」は「将」が主語であると確認した上で、「一文に主語の異なる動詞が二つある場合、訓読する際には、どちらかの動詞を使役か受身に読む必要が生じる。この文は『沛公』を主語としているため、『守』を『守らしむ』と読むことになる。『遣』を使役の助字に読んだ場合も、動詞として扱った場合も、事情は変わらない。」と説明すると理解が得られるでしょう。

最も実戦に役立つのは、〔ステップ4〕でしょう。生徒の多くは「AをしてB（せ）しむ」と丸暗記していて、使役の対象であるAが省略されるケースがあることに気づかないのです。「不肖の王に使ひせしむ。」も「絹二匹を遣らしむ。」も、「人をして」を省略した形であることを知ると、〔ステップ2〕で「『人』とは誰のことか。」と発問した意図を容易に理解できるはずです。「人をして」の「人」は、あえてその名を書き記すほどではない家臣や下僕をさしています。したがって、使役の対象の「人」を「家臣」「下僕」などと訳すことも可能ですし、「人」を無視して現代語訳することも許されるでしょう。

句法の指導にあたっては、効果的で無理のない方法を追究したいものです。

次回は、受身の形を扱います。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に12月頃アップする予定です。

「WEB国語教室」連動

世界の「国語」教育事情：第9回 フィンランド

渡邊（わたなべ） あや　津田塾大学

PISA調査などで注目を浴び、「フィンランド・メソッド」としてお手本とされることも多いフィンランドの教育。母語の重視や教科横断型の授業実践など、その取組に迫ります。

国際学力調査における好成績により、広くその教育が知られることとなった北欧の国フィンランド。その義務教育は、「総合制の基礎学校において展開される平等を志向する教育」として広く紹介されてきた。では、その後、子どもたちは、どのような教育を受けるのだろうか。基礎学校と比較すると十分に紹介されてきたとは言い難い高校での教育について紹介したい。

1　フィンランドの教育制度と高校の位置づけ

フィンランドの子どもたちは義務教育を修了すると、その多くが普通教育を提供する高校もしくは職業教育を提供する職業学校に進学する。九割超の進学者のうち、約五割が高校、約四割が職業学校を選択している。一般に、大学入学資格を目指す者は高校へ、基礎職業資格を目指す者は職業学校へ進学することとされているが、職業学校の中に、職業資格と大学入学資格双方を目指すコースができるなど、両者の区分はゆるやかになりつつある。

進学に際して、入学試験は課されないが、基礎学校における成績や書類による選抜が行われる。「競争がない」というイメージで知られるフィンランドであるが、そのプロセスはある意味厳しいものである。というのも、高校に進学するためには、四～一〇の七段階で行われる成績評価において評定平均値七以上（五段階評価の三相当）であることが求められるからだ。人気の高い高校を目指す場合には、さらにハイレベルな成績が要求される。もちろん、成績要件を満たしていない生徒にも挽回の機会はある。「一〇年生」と呼ばれる制度がそれだ。成績向上をめざし、基礎学校にとどまり、次のチャンスに備えるのである。

高校では、全七五単位から構成される教育課程を修了することと共に、大学入学資格試験に合格することが目指される。これは、大学進学のための基礎資格となるものであり、高校卒業を認定するものでも、大学への入学を許可するものでもない。しかし、フィンランドの高校生はこの試験に合格することを目指して学び、教員は生徒たちをこの試験に合格させるために教える。高校も世間も、生徒たちがどの大学に進学したかには関心がないが、大学入学資格試験に生徒の何名が、あるいは何割が合格したかということには関心を寄せる。そういう特別な位置づけを持つ試験である。

ちなみに、少なくとも四科目に合格することが求められるこの試験において、唯一の必須科目が母語である。その他の三科目も、第二公用語（フィンランド語とスウェーデン語の二言語を公用語とするフィンランドでは、母語ではない公用語を第二公用語と呼んでいる）、外国語、数学、その他の主要科目（社会科系・理科系科目を含む）という四つのカテゴリーから選ばれる。フィンランドでは、母語を中心とする言語力が知の基盤にあると考えられていることが、この試験のしくみからは窺える。

2　高校の教育課程

高校は単位制が採られている。単位制が導入された後、修学年限も、三年間の課程から、二年から四年という弾力的なものへと改められた。制度改革の際には、いわゆる「飛び級」のように、二年間で卒業する生徒の増加が期待されていたが、実際に増加したのは四年間かけて卒業する生徒であったという。

多くの高校では五学期制が採用されている。概ね七週間で一つの学期が修了する。日本の大学のように、独立した形で科目やコースが設定されている場合が多いため、学期ごとに履修科目が変化していく。生徒は、自らの関心や志望する進路によって履修科目を決定し、時間割を作っていく。各学校には、生徒の履修計画作成や進路指導のサポートをすべく、専門の教員が配置されている。

高校のクリエイティブライティングの授業

日本の国語に当たる科目は、「母語と文学」と呼ばれる。日本の学習指導要領に当たる全国教育課程基準には、母語と文学のコースとして、必修六コース（①言語・文章・コミュニケーション、②文章の構造と意味、③文学の技巧と解釈、④文章と影響力、⑤文章・文体・文脈、⑥言語・文学・アイデンティティ[1]）、選択三コース（①上級オーラルコミュニケーションスキル、②上級文章スキル、③作文と現代文化）が設定されている。メディア教育など、特徴あるプログラムを提供している高校も少なくない。生徒たちは学校で提供されるこれらのコースを必修あるいは選択の形で履修している。フィンランドの母語教育において、特に力が入れられていると感じるのは、「書くこと」である。論理的な文章作成、創造的な文章作成、双方がバランスよく、また、義務教育段階から積み上げる形で展開されている。

3　「教科」のゆくえ

近年、世界の授業風景は大きく変わりつつある。電子黒板やタブレットなど、ＩＣＴを中心とする新たな教育メディアの登場や、能動的な学習を促すアクティブ・ラーニングなど、新たな教育方法

の普及による授業スタイルの変化は、伝統的な授業風景を変えつつある。フィンランドの学校でも、タブレットを片手にグループワークをする姿や、電子黒板を利用した授業を見かける機会が増えた。デジタル教科書の利用者も増えている。紙版の教科書[2]よりもデジタル版の方が安価であることや、持ち運びに便利であることなどから、デジタル版を好む生徒も増えているという。

変化しつつあるのは授業風景だけではない。教育課程の基盤である「教科」もまた、変化しようとしている。「フィンランドでは教科がなくなる」――。昨年、イギリスの新聞紙『インデペンデント』が伝えたニュースが世界を駆け巡った。フィンランドでは、教科を廃止し、「トピック」に置き換える方向で教育改革を行おうとしているという内容である。フィンランド国家教育委員会は、「国として教科を廃止する意向はない」とする声明をすぐさま発表し、その報道を否定した。

しかし、こうしたニュースが報道されたことに理由がないわけではない。近年、顕著になっている教科の枠を飛び越えた授業実践の広がりである。フィンランドにおいて「事象学習」と呼ばれるその取組は、例えば、経済・歴史・地理・母語・外国語の要素を組み込んだ「EU」、英語と母語を

基礎学校（中学校段階）の演劇の授業

組み込んだ「演劇」など、あらかじめ設定された特定のトピックについて学ぶ、教科横断的・学際的な学習である。日本における「総合的な学習の時間」やプロジェクト学習とも共通しているが、教科を前提としているか、いないかでは、その在り方に大きな違いがある。

ヘルシンキなど一部地域では、既に様々な取組が行われている。国家教育委員会も、国として教科を廃止することは否定しつつも、「自治体には大きな裁量があり、イノベーティブな教育実践を独自に行うことができる」としている。

コンピテンシー・ベースのカリキュラムの導入とともに「教科を教える」ことから「教科で教える」ことへの転換を図ってきたフィンランド。今度は、「教科で教える」ことから「トピックで教える」ことへと舵を切ろうとしている。今後の動向が注目される。

---

(1)フィンランドの言語・文学・文化について、個人と社会双方の視点から意義を学ぶことを目的とするコース。

(2)高校の教科書は有償。また、検定制度はなく、採択についても、教員あるいは学校が自由に選ぶことができる。教科書を使用せず、独自の教材で授業を行う教師もいる。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。この記事は12月にアップする予定です。

読んできた本、読んでほしい本 ⑧

佐藤照子（さとうてるこ）
山形県立鶴岡工業高等学校定時制

本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介いただきます。

■亡き人を思う読書――回想録を読む

「ひとりの人を理解するまでには、すくなくも、一トンの塩をいっしょに舐めなければだめなのよ」（中略）相手を直接知らないことには、恋がはじまらないように、本はまず、そのもの自体を読まなければ、なにもはじまらない。

須賀敦子（一九二九―一九九八）の『塩一トンの読書』（河出書房新社、二〇〇三）を開きたくなることがある。須賀の没後に出版されたこの本は、古今東西の本に精通した著者による読書論であり、回想録でもある。なかでも表題作「塩一トンの読書」（一九九三）と「一葉の辛抱」（一九九六）をときおり読み返す。

須賀の文章になぜこんなに惹かれるのだろう。いずれも秀逸な作家論、作品論といえる文章の締めくくりに、彼女の大切な人たちの面影が思い出のように語られる。ああこの人は、一冊の本の、目に見えない無数の襞からさまざまなことを考え、記憶の引き出しを開けたり閉めたりしながら書いているのだと思う。「塩一トンの読書」のなかで冒頭の言葉を語ったのは、彼女の夫の母なのだが、「その姑も、そして夫も、じっくりいっしょに一トンの塩を舐めるひまもなく、はやばやと逝ってしまった。」の一文に、悲しみの深さを知る。須賀は亡き人を思いながら本を読み、文章を書いている。

津島美知子（一九二二―一九九七）の『回想の太宰治』（講談社文芸文庫、二〇〇八）は太宰の没後三十年にまとめたものに加筆した増補改訂版である。美知子夫人が一九九七年まで書き続けた、明晰で正確な文章である。

「著書を二冊読んだだけで会わぬさきからただ彼の天分に眩惑されていた」夫人は、妻として家計をきりもりしながらも、作家太宰の愛読者であり助手であり評者でもあった。太宰の筆墨や蔵書、佐藤一斎の掛軸などが詳細に記述され、彼女の育った家の教養と趣味がうかがえて興味深い。太宰と周辺の人々を描いて、まさに生涯かけて「一トンの塩を舐め」、太宰を回想した夫人の声が聞こえてくる。

井伏鱒二の『太宰治』（筑摩書房、一九九九）も合わせて読む。井伏の文章の面白さにくらくらし、太宰をもっと知りたくなる。「女生徒」を辿って『太宰治の辞書』（北村薫、新潮社、二〇一五）が書かれる理由も納得がいく。本は本を呼びつながっていく。

形だけの主体的・協働的な学びを超えていくために

益川 弘如（ますかわ ひろゆき）

静岡大学大学院教育学研究科准教授。専門は学習科学。県内外の様々な教育関係者と共に、新たな学びを実現するための実践研究に取り組んでいる。

すべての人が持っている資質・能力である「学ぶ力」（最近は21世紀型スキルとも呼ばれる）をいかした授業設計が、真の「主体的・協働的な学び（いわゆるアクティブ・ラーニング）」につながる。このような新たな授業構成群への一体的転換が、国語教育にも求められているが、現在、現場でよく目にするのは「形だけアクティブ・ラーニング」である。これでは知識の定着や理解深化が起きないばかりか、生徒は「主体的・協働的な学びは学習に役立たない」という学び方を学んでしまう。多くの場面で学ぶ力を発揮させるには、「前向きアプローチ」の授業設計が鍵となる。

従来の「後向きアプローチ」（正解到達型）の授業設計では、教師が設定した授業目標に対し、個人の考えが大事としつつも生徒全員が教師の望む形で表現・解釈できるよう欠損知識を埋め目標に到達させることがゴールだった。最初に生徒が知らない基礎基本とされる知識を教授した後、話し合い活動や読みを深めさせる活動をさせる。最後に教師のまとめを直接的に説明し、板書をノートに写させる。これでは、生徒は教師の言われた順番通りに振る舞うのみで、授業活動中は自身の既有知識と結び付けられず、復習しないと忘れてしまう。

一方「前向きアプローチ」（目標創出型）の授業設計では、教師が設定した授業目標に対し、生徒一人一人なりの「ことば」にさせ目標に到達させると同時に、さらなる問いや疑問を生ませ、学びが広がり続けるようになることがゴールとなる。そのため、生徒の「今ここ」状態からどれだけ知識を広げさせることができるかが勝負になる。最初に生徒に対して、本時の時間をかけて仲間と取り組みたくなる「問い」（学習課題）を出す。直後に「今ここ」時点の答えを各自記録させておく。次に、問いに対する答えを構成していくための「考える材料」を渡し、その材料を基に少人数グループで悩み対話する活動を通しながら、各自なりの答えを構成させる。そこでは目標とした知識の構成と同時に、各自なりの理由や根拠、さらなる問いや疑問が生まれ、それを教室全体で共有比較対照する。授業最後にもう一度「今ここ」時点の答えを各自記録させ、授業を通した学びの変容を把握する。

21世紀の知識基盤社会では、様々な情報を賢く取捨選択し、必要な情報を比較・俯瞰・統合するなどして組み合わせ、活用可能な知識を生み出すことが求められており、最近「トランスリテラシー」とも呼ばれている。専門家がまとめた情報を知って利用すればそれほど間違いがなかった時代とは異なり、知識を得る力よりも知識を創り出し構成する力が求められている。

しかし、相当高度にみえるこのような「学ぶ力」を人は生まれつき持っており、この学習メカニズムを「建設的相互作用」と呼んでいる。他者と目標を共有した協調的問題解決過程では、「ことば」を介した対話が、新たな知識の創発につながる。得た情報を「ことば」にして相手に伝えると、聞き手は内容を解釈し、分からない点を質問してくる。質問への解答作りが理解の見直しにつながる。同時に、相手と自分の考えの整合性を見つける活動は「情報を統合して必要な知識を生み出す」ことにつながる。これが一旦「わかった状態」から、その先を知りたくなる「わからない状態」につながり学びが広がり続ける。この「建設的相互作用」を多く引き出すような授業を前向きアプローチの授業設計の中に埋め込むことが授業の一体的転換につながる。

前向きアプローチの授業形態として最近、知識構成型ジグソー法が注目されている（詳しくはインターネットで「CoREF」と検索）。この形態は、建設的相互作用が発現しやすくなる仕組みが埋め込まれている。共有された問いを解決するための「考える材料」を3種類用意し、資料別のグループで内容を確認する。その後席替えをして異なる材料を担当した3人でグループになり、その材料を基に悩み対話し、答えを検討する。そこでは、自分なりの「ことば」で説明したり、複数の情報を俯瞰し統合するため相手の説明を聞く必然性が生じる。

昨年度、静岡大学教職大学院の現職派遣院生が、中学3年生「俳句の世界」の単元で前向きアプローチの授業に取り組んだ。これまで院生や同僚教員らは、季語や技法を一斉指導で押さえた後、それを基に典型的な数句を全体で鑑賞させ、その後、鑑賞文を書かせてグループで交流させ、取り上げなかった俳句を補足していた。これを前向きアプローチに変えた。事前に俳句を分類させ今ここの生徒の理解を把握した上で、知識構成型ジグソー法で季語や技法の広がりを持たせた。それを基に俳句を再分類させ、グループ交流を通して視点を広げさせた。その後鑑賞文を書かせて幅広く交流させた。単元全体が一貫して、生徒自身が能動的に他者と交流しながら俳句の読みを各自なりに深めていく構成だった。その結果、後向きアプローチでは見られなかった複数の視点からの読み深めや、授業時間外に教科書や資料以外の俳句を探してきて位置づけるような活動、さらには多くの生徒の感想で俳句を深め続けたい疑問や問いが書かれる形に変容した。

今後、教師主導の単元構成の一部に協働的な学びを埋め込む後向きアプローチから、単元全体が協働的な学びで構成された前向きアプローチへシフトする必要がある。実現に向け、単元設計や実践成果を共有していくコミュニティ形成も重要だろう。

国語教室美術館に寄せて

黒白の世界に刻み込む、人の世の悲しみ

―『版画平家物語』をめぐって―

井上（いのうえ）　員男（かずお）
版画家

本号巻頭「国語教室美術館」に掲載した『版画平家物語』の作者、井上員男先生に、制作の過程や作品に込めた思いなどを語っていただいた。なお、井上先生の版画作品については、「WEB国語教室」でも連載予定である。

■教師から版画家へ――紙凹版画との出会い

生まれは香川で、瀬戸内海を見ながら育ちました。壇の浦も、とても身近な海だったわけです。日本史と書道の教師をしていた父から、幼少期より書を徹底的に教え込まれました。高校で美術教諭から油絵を習ったのが、美術に目覚めたきっかけです。教育学部の美術科を卒業し、兵庫県の県立高等学校の美術教師として着任し、七年後に香川の高校に転任するまでは、現代文も担当しました。油絵は一旦挫折したのですが、創作の意欲が止むことはなく、木版画・彫刻・陶芸等さまざまな表現方法への挑戦は続けていました。美術の授業に陶芸を取り入れたことも当時としては革新的でした。

そんな中、三六歳の時に紙凹版画に出会いました。画材屋で板紙を見つけて早速試してみたところ、白い版画用紙に現れた黒い面と細い黒線が琴線に触れたのです。原版が紙ですから版画絵の具（油性）が固まると使えなくなる。そんな一回性にも引かれて紙版画に没頭していきました。植物に始まり、吉野川や瀬戸内の風景などをモチーフにした作品を手がけ、独自の手法を発見するまでに至りました。

紙凹版画は昭和四〇年（一九六五）に、ある教材会社が小学校の教材として原理を開発したものです。黒白の単調な版画に終わり、美術の領域に高まるまでには至っていなかったのですが、私が開発した技法によって、ぼかしや中間の調子が出せるようになり、立体感や遠近感といった精巧な表現も可能になりました。厚さ〇・七ミリの厚紙の片面を樹脂加工し、カッターナイフで線を彫り刻んだり、面で剝ぎとったりして紙の地肌を出し、版画絵の具を吸わせて和紙に刷る。剝ぎとる面を調整して濃淡を出したり、剝ぎとらない面の絵の具をわざと拭き残してぼかしを出したりするのです。言わば凹版と平版の手法を併用したような版画です。線に強弱を出せる独特な彫刻刀も考案し、鍛冶屋で作ってもらいました。細かい人物などはその刀で描きます。

その頃、徳島の阿波浄瑠璃や、歌舞伎をよく観ておりました。そして、さまざまな分野の芸術作品の題材になっている『平家物語』という壮大な文学を自分の版画で表現したいとの思いが湧き上がるようになってきたのです。その実現のために四七歳で勤続二五年の教職を辞して、故郷を離れて東京に出ました。昭和五四年（一九七九）のことです。

■表現のために徹底した研究と取材

文楽や能、平曲などを鑑賞し、『平家物語』を紙凹版画でどのように表現するかを考えていきました。さらに、『平家物語』を読み込み、大量に資料を集め始めました。冨倉徳次郎著『平家物語全注釈』（底本『米沢本平家物語』）を中心に、読み物系や語り物系の諸本を精読して要約したり、史料から必要事項を抜粋したりして、独創した『平家物語研究ノート』にまとめて。当初は五場面ほどのつもりでしたが、研究と制作が進むにつれて描きたい場面が増え、ついには一二場面になったのです。

古来、屏風絵は為政者が権力を示すために、室内装飾として絵師に描かせたもので、極彩色が多い。『源平合戦屏風』は室町時代から江戸時代にかけて土佐派、狩野派、町絵師の大勢が携わり、六曲一双のものでほぼ二〇種類は現存しますが、それらの多くが、華やかな色彩で緒戦の情景を描いています。私は合戦の結末を暗示するような描写をしたいと考えました。白黒と中間調のぼかしや細密描写によって、『平家物語』の無常観や深い情感に迫りたいと。そこで、各場面の詞書と版画を一双とし、絵巻物と屏風の長所を合わせた構成にしたのです。

白黒の方が色という情報がない分、集中して見てもらえ、見る人の想像を掻きたてるのではないかと思います。そして、白黒で画の世界に入り込んでいただくためには、より細部まで描きこまなければならない。そこで、作品を精読するとともに、時代考証と現地取材をとことん行いました。

時代考証は、調べれば調べるほどわからないことが増えると言いますか、奥が深くて難しい。当時の武器や武具、建築、服装、調度、楽器などの小道具、何を食べていたか、政治や信仰、気象、交通事情など、あらゆる分野にわたって細かく知る必要があります。そのつど国立国会図書館で調べては、同じ本を古書店で探して入手しました。その道

の第一人者の方々に実際にお会いして御教示いただくこともありました。

実制作に入ったのは昭和五九年（一九八四）、各地に出かけて行って風景や鎧や太刀の写生を進め、下絵を描き始めました。場面の関連上、「一の谷の合戦」「扇の的」「坂落し」「壇の浦の合戦」を同時進行で進めていきました。実際に見ないと下絵が進まないことも多くありまして。着物を新調しようと結城市で反物を見ているとき、近くのお寺が火事になった。ちょうどその頃「一の谷の合戦」の下絵で苦心していたので、申し訳ないが急いでスケッチしたなんてこともありました。

書かれている季節に合わせて現地にも訪れます。壇の浦の海には、モーターボートや船に乗って何度もスケッチに行きました。昭和六一年五月六日には漁船を借り切って、下関港から合戦があった海域に出てもらった。五月とはいえ冷たい海風が吹く曇り日で、平家一門たちの心境を想像しながら波を描きました。侍たちも女たちも、源氏の手にかかるか海に身を投じるか、それぞれ悲しい末路を受け入れざるを得なかった胸の内はいかなるものであったかと。

船の中に倒れた人や縛られた人の姿は、妻にモデルを頼んで描きました。弓矢も実際に扱ってみたいと、弓道も習った。雨の日の弓道場で練習をしていて、矢羽が濡れると篦（の）と同じ棒状になることに気づき、海に浮かぶ矢羽を描くのに生かしました。

■平家の悲劇が写し出す人間の宿命

壇の浦の戦いで勝敗を決したのは潮流であるという説もありますが、私はそうではないと思います。潮流が東向きだった時間帯は平氏が優勢で、やがて西向きに反転したことで形勢が逆転したとする黒板勝美教授の説が定説でしたが、これは大正三年（一九一四）に検証されたものです。その後技術も進み、海軍史が専門の金指正三教授がコンピュータ解析したところ、合戦が行われた田の浦辺りの海域の潮流は、合戦を左右するほど速くはなかったということがわかった。私が実際に海に出た際の実感や、瀬戸内海でよく泳いでいた子供時代の体験からも、戦況を一変させるような急流ではなかったと思います。両軍の船の位置関係も入り乱れたはずです。平家軍が、安徳天皇らを乗せた本営の唐船を狙う源氏の兵船を待ち伏せて包囲しようという作戦を立てていたことからも、常に同じ方向で相対するとは限らないことがわかります。

また、黒板説では義経は事前に付近の漁師たちに聞いて潮流の変化を知っていたのだろうとしていますが、義経の性格からしてそれはあり得ない。義経は臨機応変、その場に応じて知恵が湧いてくる戦法です。逆櫓の場面で「いくさはただ平攻めに攻めてかったるぞ心地はよき」と言っていることからもわかるように、時を争って攻撃を加える性格で、潮流の変化を待つ戦法などとらないのではないでしょうか。

私なりに、壇の浦の戦いについて考えてみますと、平家の恩恵を受けてきた熊野別当湛増（たんぞう）が源氏につき、二百艘の熊野水軍に源氏の白旗を立てて参戦してきたことが、第一の敗因でしょう。源氏の水軍は三千艘、迎え撃つ平家の軍は千余り。平家軍は数の上で圧倒的に不利でした。それでも最初は善戦していた。しかし、息子を捕らえられた阿波民部重能が合戦の途中で寝返り、平家の作戦を源氏に明かしてしまった。これが第二の敗因です。

井上員男（いのうえかずお）
1932年香川県生まれ。版画家。独自の紙凹版濃淡表現法で奥深い日本の美を表現する。＊主な作品―『版画吉野川』『版画日本の城』、雪国シリーズ、版画文集『井上員男の山の花』など。

第三の敗因は、義経が平家の船の漕ぎ手や船頭を殺させたこと。当時は戦意のない者は殺さないのがしきたりだったのですが、義経はそれを破ったわけです。画には、武装していない人が斬られている姿も多く入れました。大きな屏風の実物で見ていただかないとわからないかもしれませんが、船の下に隠れている水手の手だけが船縁にかかっている描写もあります。そんな細かいところにまでこだわって描きました。

『平家物語』は戦いを題材とした文学です。しかし、他の民族との戦いではなく、国を同じくする者同士の戦いということもあってか非情なばかりでなく、戦いの相手に対する思いやりが感じられます。深い仏教信仰が全編に流れている。それでも戦いが避けられなかったのは悲しいことです。作品を完成させて思うのは、「人間は神性と獣性をあわせもつ悲しい宿命を負わされている」「人みなの永遠（とわ）の悲しみは戦（いくさ）なりけり」。『平家物語』には、栄枯盛衰、無常観の深奥に貫かれる、人間の摂理のようなものが描かれているのではないでしょうか。戦争や残酷な殺人など、殺伐とした事件が頻発する今こそ、深い情に満ちたこの物語の世界を若い方々に感じ取ってもらいたいと願います。

（二〇一五年九月談、聞き手＝編集部）

我孫子

北原 保雄
新潟産業大学学長 『明鏡国語辞典』編者

私が乗り降りする駅の近くに「我孫子」と書いて「あびこ」と読む駅がある。よく考えもせず、調べても見ず、何となくどうしてこんな読みになるのだろう、「我」は「あ」、「子」は「こ」と読めるが、「孫」は「び」とは読めない。「あびこ」ってどういう意味なんだろうかと思っていた。大阪市の環状線にも同じ名の駅がある。

それが、ある時ふとしたはずみで、解けたのである。分かってみれば何のことはない。「あ」「びこ」と切る。「あ」はあれ、われ、わたしの意味、「びこ」は「ひこ」が連濁で「びこ」となったもので、「ひこ」は孫の子、つまり曽孫のことだ。「我」と「孫子」を当てる漢字表記も全く問題ない。どうして気づかなかったのだろう。

3音の言葉だから、3音全体か、1音+1音+1音、2音+1音、1音+2音に切って、それぞれに意味を考えてみる。3音全体の場合は、「あびこ」全体の意味が分からないで問題にしているのだから、最初から問題にならない。

次に、1音+1音+1音。「あ」「び」「こ」のそれぞれに切って考えてみても分からない。漢字表記から、「あ」はわれ、「こ」は子どもの意味のようにも思われるが、「び」の意味が分からない。

そこで、2音+1音に切って考えてみる。「あび+こ」。「こ」は、女性の名前に「春子」「夏子」「秋子」などと「こ」を付けるものがあるし、子どもの意味もある。しかし、「あび」が何のことかは見当さえ付かない。

ここまでは考えたことがあるが、それ以上は考えずに放っておいたのである。それが、ある時ふと、1音+2音に切ってみることを思いついた。「あ」に「我」の漢字が当てられ、われという意味があるのだから、1音+2音に切って深く考えてみることをすべきだった。1音+2音という語構成の和語は枚挙に暇のないほどたくさんある。思いつくままに例を挙げれば、「鵜飼い」「木遣り」「酢飯」「巣立ち」「田中」「手先」「名折れ」「荷物」「値引き」「野焼き」「羽音」「日脚」「目尻」「目白」「藻屑」「矢柄」「夜中」「輪投げ」などいくらでもある。

それなのに、それ以上に考えを続けなかったのは、「びこ」の意味が分からなかったからである。「孫子」という漢字が当てられているのにである。孫の子は、つまりは「ひこ」である。「びこ」はその連濁形である。連濁した「びこ」が何のことか分からなかったことや、「こ」を「ひこ」の「こ」とは考えずに「あび」の「こ」と考えてしまったことなどに、正解が得られない落とし穴があった。

最近、「世間擦れ」を間違えた意味に使う人が増えている。本来、「世間ずれ」の「ずれ」は「擦れる」(=こすれる。世間なれして悪賢くなる)」の連用形で、「世間ずれ」は、「世間で揉まれ、ずる賢さを身につけていること」という意味だ。それを「ずれる(=本来的な位置から少しはずれる)」の連用形だと思い込んで、「世の中の考えから外れていること」という意味に使っている人が多くなっている。文化庁の行っている『国語に関する世論調査』(平成二五年度)では五五%を超えて、本来の意味に使っている人三五・六%を大きく上回っている。「世間擦れ」の「擦れ」は、「股ずれ」「靴ずれ」「床ずれ」などの「擦れ」で、類例も多く間違えるはずはないのだが、「すれ」が連濁して「ずれ」になったために、誤解されてしまった。

しかし、他人のことを笑ってばかりはいられない。「ひこ」が連濁で「びこ」になったために、その意味に到達することができなかったのである。

ちなみに、直木孝次郎「阿比古考」や我孫子市のサイト「あびこ電脳考古博物館」には、「我孫子」と書いて「あびこ」と読む理由や「我孫子」の意味については触れていないようだ。『日本国語大辞典』第二版にも、「網引(あびき)の音転といわれる」という語源説を載せているだけである。

石川忠久　著

石川忠久　漢詩の稽古

四六判・並製・二五六頁
定価＝一八〇〇円＋税

評者＝池澤一郎
早稲田大学文学部教授

日本語から漢字、漢語は除去しえないので、漢字、漢語の精確な運用能力を維持向上させねば、日本語は崩壊する。新井白石、荻生徂徠といったかつての政治家は漢詩漢文を作ったから、精確な和文を書き綴った。

本書は岳堂石川先生が主催する漢詩道場稽古の記録三十年分の精髄である。新旧の門下生が満を持して寄せた漢詩が、岳堂先生の添削によって、より見事な作品に生まれ変わる。改稿後の自作を目にし、改めて漢字、漢語の精妙な働きに瞠目する参加者の表情が目に浮かぶ。

岳堂先生は添削をする理由を諄々と説いて止まないが、「理屈にあわない発想は慎む」「主題を生かすための舞台を作る」「既にわかっていることはわざわざ言わない」等々の理由は、作詩の心がけを超えて、人生哲学の趣を呈する。

漢字、漢語の精確な運用能力を備えれば、見事な日本語の書き手となれ、さらには岳堂先生のごとき君子人たりうることは、門人諸氏が本書に添えた名文がこれを保証している。

串田久治・諸田龍美　著

漢詩酔談――酒を語り、詩に酔う

四六判・並製・二二四頁
定価＝本体一八〇〇円＋税

評者＝守本哲也
岡山県立玉野光南高等学校

本書は、酒を詠み込んだ漢詩を「肴」にした、著者のお二人の対談が収められている。どの対談も、実際に一杯やりながらなされたのではないかと思われるぐらい軽快なテンポで進められるが、随所に「深イイ」話がちりばめられており、それが実に絶妙なバランスなのである。

また収録されている三十首の詩には、それぞれ独特のわかりやすい訳も添えられている。圧巻は最後にある于武陵の「酒を勧む」である。井伏鱒二の名訳の向こうを張って、新たな「名訳」がなされている。これだけでも一読の価値があるだろう。

選挙権も十八歳から認められることとなり、そのうち喫煙や飲酒も十八歳から認められるようになるかもしれない。われわれ高校の教員は、本当の「大人のふるまい」について、生徒たちにこれまで以上に教えてやらなければならなくなりそうだ。ではこの本を、その材料として活用しようか。いや、その前にまずはこの本を「肴」にして一献傾け、「明日への活力」とすることにしよう。

大修館書店編集部　編

すてきな漢字に出あえる 赤ちゃんの名づけ事典

A5判・並製・四一六頁
定価＝本体一八〇〇円＋税

評者＝中楠　玲

『大漢和辞典』『新漢語林』などの漢和辞典を刊行する、大修館ならではの名づけ事典だ。

全七章のうち「漢字からさがす」の章を開くと、名前に使える漢字の読みや意味、画数、その字を使った名前の例などが並ぶ。解説は非常に詳しく、簡単な漢和辞典としても使えそうなほど。名づけ事典でありながら漢字の解説にも手を抜かない姿勢は「硬派」とも言えるが、この硬派な解説こそが、名づけのヒントともなるのである。

たとえば、「大」の項目。「意味」欄の①～⑥の意味を追っていくと、「おおきい」以外にも「優れている」「重要である」など名づけに活かせそうな意味を見つけることができる。また、「香」の項目には「薫」との意味の違いの解説があり、漢字を選ぶ際の参考にできる。

意味の似た漢字を集めた「類義」欄、その字を使った言葉を紹介した「ことば」欄などもあり、眺めているだけでも名づけのアイデアが湧いてきそうだ。

装丁も可愛らしく、贈り物としても喜ばれそうな一冊だ。

佐渡島紗織・坂本麻裕子・大野真澄　編著

レポート・論文をさらによくする「書き直し」ガイド――大学生・大学院生のための自己点検法29

近刊

A5判・並製・一六〇頁（予定）
予定価格＝本体一六〇〇円＋税

評者＝小崎祐子

本屋に行くと、論文やレポートの書き方を指南した本がたくさん並んでいる。しかし、それらをよく読んだからといって必ずしもよい文章が書けるとは限らないということは、日々学校現場で文章指導をされている先生方はよくご存じだろう。スポーツでも楽器でも、正しいフォームを頭で理解するだけでなく、実際にやってみて、その問題点を把握し、改善のための技術を身につけ、何度も繰り返して定着させるというステップを踏むことが上達のための唯一の方法であり、それは文章の書き方でもまったく同じだ。

本書は、早稲田大学に開設されているライティング・センターで実際に指導を行っている文章指導員による、論文・レポートの自己点検法が示されたテキストである。センターに蓄積されたノウハウをもとに、書き手が抱える悩みや陥りやすい過ちの実例を取り上げ、問題点と改善の方法を具体的に解説する。学生・生徒が自分の文章のレベルをぐっと上げるためのよい参考書になるだろう。

『ビジュアルカラー 国語便覧』で見る 芥川龍之介と「羅生門」

B5判・496ページ
オールカラー
本体880円＋税
大修館書店編集部［編］

豊富な図版資料で人気の大修館『ビジュアルカラー国語便覧』。ここではその図版をとおして、芥川龍之介と「羅生門」の世界を探訪してみましょう。

＊「便覧p.●」は『ビジュアルカラー国語便覧』のページ、「本号p.●」は関連する本号記事のページ。

「羅生門」を書いた学生時代の芥川（便覧p.232）
芥川は右から２人目。この頃の失恋が「羅生門」執筆のきっかけになったとされる。詳しくは『国語教室』本号p.4へ！ ▶本号p.4

『羅生門』出版記念の会（便覧p.208）　芥川は左手前。参加者には谷崎潤一郎、佐藤春夫、和辻哲郎なども（詳しくは便覧に）！ このとき、このレストランの主人に揮毫を求められ、「本是山中人」と書いた。▶本号p.10

「羅生門」豆知識

創造の源泉『今昔物語集』

「羅生門」のもとになった本は、平安後期に成立した『今昔物語集』。
『ビジュアルカラー国語便覧』の『今昔物語集』解説ページ（p.144）では、「羅生門」のもとになった話の冒頭を収録。芥川の「羅生門」では下人がどこから来たか不明だが、原作では「摂津国の辺」から盗み目的で都に来た人物になっていることがわかる。

▶本号 p.10,26,34,40

作品へのアプローチ

今昔、摂津ノ国辺ヨリ盗セムガ為ニ京ニ上ケル男ノ、日ノ未ダ明カリケレバ、羅城門ノ下ニ立隠レテ立テリケルニ、…

今となっては昔のことだが、摂津国のあたりから、盗みを働こうとして京に上ってきた男が、まだ日が明るいうちだというので、羅城門の下に立ち隠れていたところ、…

（巻二十九）

▲「池尾禅珍内供の鼻の話」

▶馬盥人の話（『今昔物語』江戸期版本）

Close up!

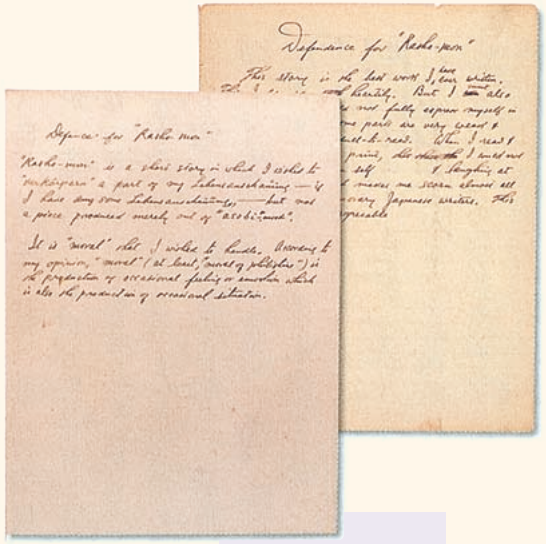
『今昔物語集』は、さまざまな作家が素材として用いている。芥川作品では他にも「鼻」「藪の中」「芋粥」などがある。

▶本号 p.10,26,34,40

便覧 p.144

羅生門復元図（便覧 p.234）　羅生門の大きさは、本体正面約36m、高さ約21m。脇門まで含めると、全長約54mにもなる。ちなみに高さ21mは校舎4～5階建てに相当する。このように生徒が実感できるような説明をすることによって作品世界をリアルに想像させることも大切だろう。

▶本号 p.40



▶「羅生門」の弁護　芥川の大学ノートに記された五箇所の文章の内の二つ。（山梨県立文学館）

羅生門の評判（便覧 p.234）「羅生門」は発表当初あまり評判がよくなかった。それを受けて、芥川が書いた作品弁護の文。いわく「十分な自己表現ができなかった…」。
＊実際の大修館『ビジュアルカラー国語便覧』には全訳がついています。

便覧 p.234

「羅生門」ははじめ雑誌『帝国文学』に発表され、その後、単行本化された。出版社は北原白秋とその弟が経営する阿蘭陀書房。芥川と北原白秋との関係とは……？　▶本号 p.26

見やすく使いやすいと大好評 国語便覧の決定版!

ビジュアルカラー

国語便覧

B5判・496ページ
オールカラー
本体880円＋税
大修館書店編集部［編］

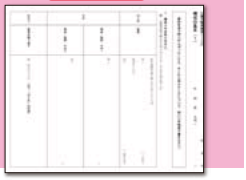
2016 春より

授業や定期試験をがっちりサポートする 役立つデータと問題集をご用意

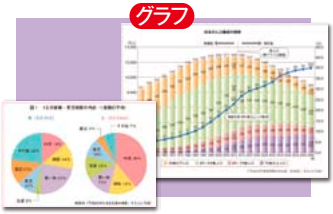
準拠CD-ROM 教師用

- **自己PR・面接**から**レポート**まで、**言葉と表現編**の学習に便利な**ワークシート**を新たに収録!
- その他、本文のWord・一太郎データ、地図や参考資料の画像データ、準拠問題集のデータ等を収録しています。
- 画像データは一点ずつ収録しているので、テキストと画像を組み合わせてオリジナルプリントの作成が可能です。

ワークシート

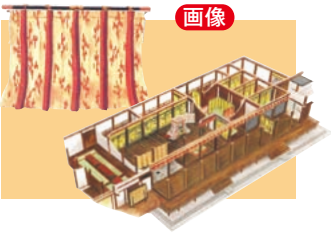


グラフ

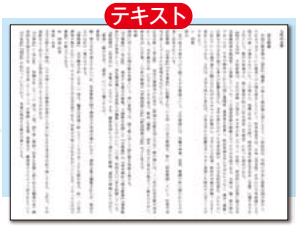


地図

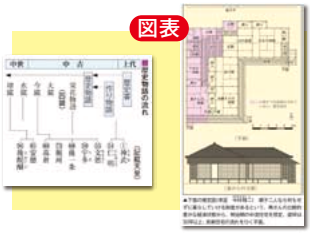
画像



テキスト



図表



＊準拠CD-ROMの画像データには、自社作成の地図や図表等を収録しています。

準拠問題集 生徒用

- **中学校からのブリッジ問題**や**やさしい問題**を新たに収録!
- 文学史、文法・句法、言葉のきまりなど、『ビジュアルカラー国語便覧』に即して要点を確認できる完全準拠の生徒用問題集です。
- データは、準拠CD-ROMに収録しています。

大修館書店